

修士論文

『万川集海』に引用される内容についての比較研究

三重大学大学院人文社会科学研究所 地域文化論専攻

120M207 L1 DEYANG

《目次》

《はじめに》・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一頁

《第一章》武経七書の引用・・・・・・・・三頁

〈第一節〉日本に伝わった兵法・・・・・・・・三頁

〈第二節〉『孫子』・・・・・・・・六頁

〈第三節〉『六韜』・・・・・・・・二五頁

〈第四節〉『三略』・・・・・・・・二九頁

〈第五節〉『呉子』・・・・・・・・三四頁

〈第六節〉『尉繚子』・・・・・・・・三五頁

〈第七節〉『司馬法』・・・・・・・・三六頁

〈第八節〉『李衛公問对』・・・・・・三七頁

《第二章》他の兵法書の引用・・・・・・・・四五頁

〈第一節〉『兵鏡』・・・・・・・・四五頁

〈第二節〉『七書直解』・・・・・・・・四七頁

〈第三節〉『太白陰経』・・・・・・・・四七頁

〈第四節〉『十一家注孫子』・・・・・・四九頁

〈第五節〉『孫子書校解引類』・・・・・・五二頁

〈第六節〉『喻子十三種秘書兵衡』・・・・五三頁

〈第七節〉『武経七書匯解』・・・・・・五六頁

《第三章》儒教書籍の引用・・・・・・・・五九頁

〈第一節〉『論語』・・・・・・・・五九頁

〈第二節〉『大学』・・・・・・・・六四頁

〈第三節〉『孟子』・・・・・・・・六六頁

〈第四節〉『易経』・・・・・・・・六七頁

〈第五節〉『性理大全』・・・・・・・・六八頁

〈第六節〉『論語集註』・・・・・・・・六九頁

《第四章》 歴史書と文芸作品の引用	七〇頁
〈第一節〉 『史記』	七〇頁
〈第二節〉 『三国志』	七四頁
〈第三節〉 『左傳』	七六頁
〈第四節〉 『宋書』	七七頁
〈第五節〉 詩歌と文章	七八頁
〈第六節〉 演劇	七九頁
《第五章》 不明な引用と疑問点	八一頁
〈第一節〉 不明な引用	八一頁
〈第二節〉 疑問点	八三頁
《副表》	八五頁
《おわりに》	八六頁
《参考文献・資料》	八八頁
《註》	八九頁

《はじめに》

『万川集海』（まんせんしゅうかい、ばんせんしゅうかい、旧字体表記・萬川集海）とは、江戸時代前期の忍術伝書である。福島嵩仁の『万川集海』の伝本研究と成立・流布に関する考察¹⁾により、著者は富治林傳五郎保道（ふじばやしでんごろうやすみち）であると確定できた²⁾。全二二巻。延宝四年（一六七六）丙辰仲夏五月に藤林左武次保武による序があり、その書名において「細い川もたくさん集めれば海になる」という意味でつけられ、すべての忍術の流儀をまとめ上げた。

戦乱が落ち着いた江戸時代前期中葉に大成した忍術書で、伊賀・甲賀の古今四九流派で一子相伝とされた忍術書からの抜粋を体系的に集大成している。そのため、写本や類本が各流派に残されることとなった。写本は大原勝井家本などが今に伝わる。また、甲賀の大原数馬・上野八左衛門・隠岐守一郎らが寛政元年（一七八九）四月、寺社奉行・松平輝延を通じて江戸幕府に献上した内閣文庫本が有名である。総論的な「序」

「凡例」「目録」「問答」を収めた一巻に次いで、「正心（せいしん）」二巻、「将知（しょうち）」四巻、「陽忍（ようにん）」三巻、「陰忍（いんにん）」五巻、「天時（てんじ）」二巻、「忍器（にんき）」五巻の、全二二巻で構成されている。このうち、「正心」では、忍術の倫理的側面を強調し、仁義忠信を守るよう説いている。「忍器」では水蜘蛛など様々な忍器について、口伝の部分を除いて詳細に記している。また、これらに加えて「陰人ノ上手十一人」の記述もある。「口伝あり」「鍛錬によるべし」という記述を除いて、技術を詳細に説明する方針が貫かれている。これらに、『忍術問答（由来之章）』『忍道梯階論（にんどうていかいろん）』『和漢忍利証語抄（わかにんりしやうごしやう）』の三巻を付録させて完本としている。

忍者学において、「忍者」に関する歴史や文学的な研究が多かったが、「忍術」に対する研究は少ない。勿論この忍術書の集大成とされる『万川集海』への研究も多くはない。ここ近年、中島篤巳により『完本 万川集海』³⁾が出版されたことや、福島嵩仁の『万川集海』の伝本研究と成立・流布に関する考察⁴⁾などにより、『万川集海』への研究は活発化しつつある。だが、『万川集海』には漢文の引用が沢山あることで、研究に困難を与えてしまう。中国人である私こそ、この部分に力を入れたく、これらの漢文引用を究明したい。本論文では、『完本 万川集海』国書刊行 中島篤巳 訳註⁵⁾に基づき、『万川集海』にある中国古典書籍からの引用について、詳しい分析を通し、比較研究を行う。これにより、その引用からの影響、引用自体の相応しさなどを明らかにする。

『万川集海』では、漢文引用は概ね三種類に分けられる。一、兵法書からの引用。二、儒教古典からの引用。三、文芸作品と歴史書からの引用、である。また九カ条の不明な引

用もある。これにより、本論文は五章からなっている。すなわち、(一)武経七書の引用、(二)他の兵法書の引用、(三)儒教書籍の引用、(四)歴史書と文芸作品の引用(五)不明な引用と疑問点である。主に『万川集海』原文に書かれた内容と元の中国古典の内容と比較し、両方の意味、矛盾するかどうかなどを明らかにする。

この論文を書くにあたり、日本の本はあまり参照にならなかったもので、中国の古典籍を多く参照した。

《第一章》武経七書の引用

古代中国の兵法は戦国時代 (B. C. 453～B. C. 221) から漢代 (B. C. 206～220) までにそのほとんどが完成を見ている。『孫子』・『呉子』・『尉繚子』・『司馬法』・『六韜』・『三略』などは、おおむねこの時代にかけて求められた。それ以降、唐代 (六一八～九〇七) の『李衛公問对』のほか、特に新たに発展していなかった。漢代、古代中国では儒家思想が統治理念となり、「武」ではなく、「文治主義」旨とされた。そのため、軍事力が非常に低下してしまう。北宋時代 (九六〇～一一二七) に、たびたび北方異民族の侵入を受けるようになったことから、軍事教育の整備が急務となった。一〇四三年、四代皇帝仁宗 (在位一〇二二～一〇六三) の命により『武経総要』が編纂された。一〇六四年には、「武挙」と呼ばれる上級武官試験の科目として、『孫子』・『呉子』・『司馬法』・『六韜』・『三略』の兵法書に関する筆記試験を行うとの提案があった。一〇八〇年、先の五書に『尉繚子』・『李衛公問对』を加えた七書の校訂が行われ、兵学の教科書として刊行されるに至った。これらが「武経七書」あるいは単に「七書」と呼ばれている。武経七書は、古代中国北宋朝廷の時代に発行された初めての軍事教科書である。中国の軍事歴史学においては、極めて重要な存在だと認められている。

《第一節》日本に伝わった兵法

吉備真備と中国兵法

中国兵法を日本に伝える最も古い人は吉備真備であるとよく知られている。彼は奈良時代の人で、吉備地方(今の岡山県)の下級武官の子であったが、のちには東宮学士(天平十三年、七四一)、春宮大夫から大宰大貳を経て造東大寺長官となり、累進して参議・中衛大将から称徳朝には右大臣(天平神護二年、七六六)にまでなったのである。真備は前後二回にわたって渡唐したが、最初は元正天皇の時で、二十二歳(霊龜二年、七一六)の若い学生として、十九年間唐にあって、経史を初め諸学の研鑽を積んだのである。かくて学識豊かな真備は、帰朝後前記のような栄進の道を進んだが、彼の栄進の端緒が軍学・兵法に関係あったとは、『吉備真備』(人物叢書)の著者の宮田俊彦氏の見解である。

また、実は中国兵法の伝来は、すでに吉備真備以前にあった。それを立証するものは『日本書紀』の天智天皇十年正月の条にある記事で、真備の帰朝より六十五年前のことである。

『日本書紀』編纂者の兵法知識

『日本書紀』は元正天皇の養老四年(七二〇)舎人親王並びに太安麻呂等により編纂され、漢文で書かれた日本の最初の官撰の国史であるが、彼ら編纂者が中国兵書による兵法知識をすでに修得していた。一例を挙げれば、継体天皇の二十一年(五二七)筑紫の磐井が叛いたとき、討伐の詔として下された文があり、その文中に、

良將之軍也、施恩推惠、怒(おもんはかりて)己治人、攻如河決(さくる)、戦如風発(たつ)。(『日本書紀』卷十七)

とあるのは、字句に前後はあるが、『三略』の上略に見える思想であり、またつづいて出された詔に、

大將民之司命、社稷存亡於是乎在云々(『日本書紀』卷十七)

とあるのは、『孫子』作戦篇の最終の句の影響であろう。この記事は『日本書紀』編纂時を遡ること一九〇年以前の継体天皇頃に、『三略』や『孫子』に見るような中国の兵法思想が日本にあり、それによって詔勅が書かれたかのような錯覚を起こさせるものであるが、これはおそらく書紀編集者が、奈良時代前後に普及した中国の兵法知識を借りて、詔勅の意を表現したものと推定されよう。

平安時代の中国兵法

平安時代にはいつて中国兵法は知識人の間に次第に盛んになったと考えられるが、中でも『孫子』はその最たるものであった。桓武天皇の延暦八年(七八九)五月癸丑(十二日)の詔において、征東大使が蝦夷征討の遅滞を詰責されたとき、「夫兵貴拙速」、未聞巧遅(『続日本紀』卷四〇)と記されているのは、『孫子』作戦篇に「兵聞拙速、未観巧之久」とある語の援用である。また源義家の飛雁乱列の故事も孫子学の反映であるし、かつて平安時代には純然たる中国兵書のほかに、天文・陰陽・五行などの書が学問の対象となり、平安時代人の思想構成に影響したのである。それは宇多天皇の寛平年間(八八九〜八九七)に、藤原佐世が勅命によって撰した『日本国見在書目録』によって、当時日本に存在した、これらの関係書目名を知ることができるからである。

すなわち、兵家の部では『司馬法』三卷(齊相司馬穰苴撰)・『孫子兵法』二卷(呉將孫武撰)・『孫子兵法書』一卷(巨詡撰)・『孫子兵書』三卷(魏武解)・『孫子兵法八陣図』二卷・『続孫子兵法』二卷(魏武帝撰)・『太公六韜』(周文王師姜望撰)・『太公陰録符』一卷・『黄石公三略記』三卷(下邳神人撰)・『黄帝蚩尤兵法』一卷・『太公明金匱用兵法要記』一卷・『太公謀世六甲法』一卷・『武林』一卷(王略撰)・『六軍鏡』三卷・『軍誠』三(李定遠撰)・『兵書对敵推变逆順法』・『真人水鏡』十卷・『軍勝』十卷・『魏武帝兵書』十三卷・『兵書接要』三卷(魏武帝撰)・『雲氣兵法』一卷・『投壺

経』二卷・『象戲経』一卷・『彈碁法』一卷・『玉帳』・『兵書要略』・『金海』三七卷(隋蕭吉撰)・『梁武帝兵法』二卷など、まことに多種多様である。

天文家の部では、『天文要集』三卷・『天文占書』四卷・『天官星占』六卷(陳卓撰)・『流星占』一卷・『彗星占』二卷・『日月五星占』一卷・『五星廿八宿占』一卷・『雲氣讖図』一卷・『日月讖図』一卷・『定天論』三卷・『唐七曜符天曆』一卷などが主なものである。

五行家の部では『五行大義』一卷・『九宮経』四卷・『六壬経』二卷・『易髓要決』一卷・『周易筮』四卷・『遁甲』六卷・『遁甲秘要』一卷(葛洪撰)・『三元九宮遁甲』三卷・『遁甲立成』六卷・『大唐陰陽書』五十一卷・『新撰陰陽書』五十卷(呂才撰)・『瑞応図』十五卷・『符瑞図』十卷(顧野王撰)・『新撰宿曜経』七卷等のほか多数の書目を挙げている。

しかし兵法書以外に、天文・五行書のすべてが、後世の日本兵法に影響したとは考えられないが、思想的にも技術的にも相当色々な多くのものが採り入れられたのは事実である。

大江家兵法の伝流伝説

源義家が大江匡房に兵法を学び、飛雁の列を乱すのを見て伏兵があるのを知り、勝利を得たという故事(『古今著聞集』武勇第十二)は、白河天皇の永保年間(一〇八一〜一〇八三)にあった奥州後三年役(秋田県横手市金沢付近)のときの伝説であって、一般周知のことである。これは『孫子』行軍第九にある「鳥起者伏也、獸駭者覆也」という兵法知識を実戦に利用したことを証するものであるが、当代随一の碩学と称せられた大江匡房が『孫子』を始めとする中国の兵法哲理に精通していたことを示すものである。それ以来大江家は兵法学に縁のある家と考えられるに至った。中世以後兵法家において信奉された伝説によれば、中国兵法の伝来系譜はほとんど大江系統に集約されるとともに、他方義家以後源氏に伝流するものである。

後世の兵法家の伝によれば、中国の古兵法は軍神摩利支天に発するとし、伏羲・神農・黄帝の時代を経て、堯・舜・湯王の時代に至り、大上老君(老子)・太公望・黄石公・張良へ伝わり、履陶公から応神天皇に伝えられたが、日本ではその後廃絶した。しかし中国では履陶公の伝は陳石公・謙石公と伝わり、それより十六伝して竜取將軍文石公のとき、大江維時が入唐して兵法の奥義を受け、維時―重光―匡衡―成衡―匡房へと伝統を継いだというのである。これは後世起こった上泉流兵法の伝統伝説であるが、大江維時の兵法伝来説は他の諸流にもそのまま同じように信用されている。

大江維時は村上天皇の応和三年(九六三)六月七日、七十六歳をもって没したが、このとき従三位中納言であった。彼は醍醐朝以来文章博士・大学頭・東宮学士等をつとめた碩学で、博聞強記をもって聞えた人である『大日本史料』(一ノ十二)所収の『大江系図』によれば、維時は醍醐天皇の延長年中(九二三〜九三〇)入唐し、明州の龍頭に従って『三略』の骨法を学んだと記し、他の『大江氏系図』(『続群書類従』第七系図部所収)および『諸家系図纂』には入唐ののち、「七書軍勝」を伝受し、朱雀天皇の承平年中(九三一〜九三七)帰朝したと伝えている。維時の入唐説は『公卿補任』や『尊卑分脈』などの確かな資料には見えないから、その信憑性は稀薄であるが、後世の兵法家はいずれも、この兵法伝来説を信じており、彼はその将来した中国兵書を和訳して『訓閲集』を撰述したと伝えられている^[31]。

江戸時代の兵法

近世すなわち江戸時代の兵法学は、さまざまな要素を包蔵しつつ、いろいろな流派兵法が出現した。

また、一五九九年、徳川家康の命によって日本でも活版印刷が始まったが、この時には兵法書のうち、『六韜』と『三略』がまず刊行された。そして、一六〇六年には、『孫子』や『呉子』なども含め、「武経七書」がまとめて刊行されている。それまで「武経七書」は写本として伝えられていたのだが、印刷が行われたことで、「武経七書」は飛躍的に広まっていく。

〈第二節〉『孫子』

『孫子』は、紀元前五〇〇年頃の中国春秋時代の軍事思想家・孫武の作とされる兵法書で、武経七書の一つである。古今東西の軍事理論書のうち、最も著名なものの一つであり、紀元前五世紀中頃から紀元前四世紀中頃あたりに成立したと推定されている^[32]。『孫子』以前は、戦争の勝敗は天運に左右されるという考え方が強かった。孫武は戦争の記録を分析・研究し、勝敗は運ではなく人為によることを知り、勝利を得るための指針を理論化して、本書で後世に残そうとした。

日本への伝来

『孫子』が日本に伝えられ、最初に実戦に用いられたことを史的に確認できるのは、『続日本紀』天平宝字四年(七六〇年)条である。当時、反藤原仲麻呂勢力に属していたことで大宰府に左遷されていた吉備真備のもとへ、『孫子』の兵法を学ぶために

下級武官が派遣されたことが記録されている。数年後に起きた藤原仲麻呂の乱では実際に活用している。

律令制の時代、『孫子』は学問・教養の書として貴族たちに受け入れられた。大江匡房は兵学も修めていたが、『孫子』もその一つであり、源義家に教え授けている。実戦において積極的に試された例としては、源義家が前九年・後三年の役の折、孫子の「鳥の飛び立つところに伏兵がいる」という教えを活用して伏兵を察知し、敵を破った話（古今著聞集）が名高い。ただし古今著聞集が発行されたのは後三年の役の約一七〇年後のことであり、この兵法が『孫子』であるとの記載も存在しない^[5]。

『万川集海』では、『孫子』からの引用が最も多く、直接引用した部分は全部で三十箇所である。また『孫子』の理論は『万川集海』に深く影響を与えた。本論文では、直接引用の内容について、比較し、分析する。

①『万川集海』原文：卷一・序・P497（『完本「万川集海」』）

「凡兵者國之大事死生存亡之道也」

現代語訳：P39（『完本「万川集海」』）

軍事は国の生死存亡の根幹をなし、国家安泰の基本となる極大事である。

『孫子』原文：（始計）

「孫子曰：兵者，國之大事，死生之地，存亡之道，不可不察也，」

比較：

『孫子』では、これを以て始まる、軍事についての重要性が述べられている。『万川集海』の序文にそのまま引用された。特に問題はない。

②『万川集海』原文：卷一・忍術問答・P507（『完本「万川集海」』）

「用間篇曰周之興也呂牙左商」

現代語訳：P47（『完本「万川集海」』）

周が建国された時、呂芽という人物が商に居た。

『孫子』原文：（用間）

「昔殷之興也，伊摯在夏。周之興也，呂牙在殷，」

比較：

『万川集海』において、『用間篇』は一番多く引用されている。古代中国兵法書において、『孫子』は初めて問諜について具体的に論じた兵法書であった。また「伊摯」と「呂牙」が問諜であると説かれるのも『孫子』が始めとしている。それからこの二人が

間諜であることが世間に知られるようになった。『万川集海』では、この二人の間諜を例にして、間諜の真実性や重要性を述べている。

なお、『万川集海』原文では、呂牙左商と書かれているが、「在」を間違えて「左」に書いてしまったと推測する。

伊摯と呂牙について調べた結果、以下のことが明らかになった。

伊摯（伊尹）

殷氏内部の王族から分化した殷族の首領である伊尹は部族がひどい災難に遭い、一族を率いて、有莘氏に寄宿した。伊尹には才能があるので、「庖正」（一族の日常生活に用いる材料、物などの後方勤務）という官職に務めていた。そして、有莘氏は姫を湯に嫁いだ時に、護送官員として一緒に商に行った。それから商で活躍したという²³⁾。

伊尹は間諜として夏を滅ぼすことについて…

文献によると、伊尹は確かに夏朝に長く活動していた（『孫子』用間篇、『孟子』公孫丑上、『呂氏春秋』慎大）。また、夏に在るうちに、夏王桀の妻である妹喜と付き合っている、情報収集をしていた。だが、この中に、少々疑問がある。

一、伊尹はどうやって妹喜とつきあったのか。伊尹は元々ただの有莘氏の護送官員で、身分が低い。また趙岐が『「孟子」公孫丑上』に作った註により、商湯は伊尹を夏桀に推薦したが、夏桀に重用されていなかった。故に、伊尹は夏桀、また妹喜と直接に連絡を取るのはかなり難しい。

二、伊尹は頻りに夏と商の間に往来していた（『孟子』…五就湯、五就桀者、伊尹也）。これは上智の間諜としては有り得ない話である。間諜の身分がばれやすい。

三、古代文献に、伊尹は誠に夏桀に仕えたいというものもある。（『孟子』公孫丑上…治亦進、乱亦進、伊尹也。「湯の治にも、夏の乱にも構わないが、出世したい」）

清華簡『赤鵠之集湯之屋』の発見で、これらの疑問点の解決にとても助かった。

この簡文では、伊尹、商湯、商湯の妻である紆荒、夏桀で、この四人に言及する。簡文によると…

伊尹は料理が上手なので、主人である紆荒は「赤鵠之羹」を食べさせよと伊尹に命じて、二人は一緒にこつそりとそれを食べた。このことは商湯に気付かれ、伊尹は怒った。商湯を避けるため、やむを得ずに夏に行った。その時、伊尹は商にもう戻れないと思いい、真心に夏に仕えたいという。これにより、伊尹と商湯の連盟に最初は矛盾もあり、隙はなくてもないといえる。伊尹は夏に着いた時、ちょうど夏桀が病気にかかり、そして、伊尹は無意に夏桀の病を治したという。これで、なぜ伊尹は夏桀、また妹喜と接触できたのか分かった。夏桀の命の恩人になった伊尹は宮廷へも行け、妹喜と接触するこ

とも可能になった。だが、夏桀の暴政に不満を持ち、最後商湯に戻った。(伊尹がしばしば商と夏を往来することは商と夏の取捨に關係する可能性が高い)

以上、商湯と伊尹の君臣關係は長い時間を経て、形成したといえる。この過程はすべて順調とは言えない。伊尹は商湯に使え、また出て夏桀に就職し、また商湯に戻るといふ。沢山夏の情報を手に入れたので、夏を滅ぼすのに種を入れた³⁾。

伊尹は自らが間諜である覚悟をしているとは言えないが、相手の情報を沢山手に入れたことにより、戦争に重大な作用が効いたのは事実である。

呂牙(呂尚)

呂尚(出生不明、B.C.1015年)または太公、称姜太公、太公望、斉太公、太公、師尚父、呂望、子牙とも言う。彼の真実の歴史について、史料が少なく、主流の政治文化である儒家思想及び近代疑古思想により、彼に対する認識はまだ曖昧で明晰ではない。ただしその基本は分かっている、即ち、周王を補佐して殷を滅ぼすことである。

呂尚が入周する理由と機会…

『史記・斉太公世家』により、呂尚一族は呂国で生まれ、夏商の時期には既に庶人になり、東海(現在の山東省安邱県の周辺)に世代に住んでいた。文献により、呂尚は半生を経つても重用されず、不遇で生活が苦しいという。

「太公田、不足以償種。漁、不足以償綱。」(太公は農業をして、種の元が取れない。漁をして、綱の元も取れない。)(『釋史』卷十九引『說苑』)

嘗て「老婦之逐(太公は年を取った妻に駆逐された)」になり、当時の人に「逐夫」・「出夫」と軽蔑して言われた。(『戦国策・秦策五』)

また「売肉于朝歌。肉上生臭不售」(太公は殷の首都である朝歌で肉屋をやったが、肉が腐るまでも売れない。)(『說苑・尊賢』)

出世しようが、「嘗事紂。紂无道。去之」(嘗て紂に仕え、紂が無道で、辞めた。)(『韓詩外傳』卷八)

それから、殷商を出て、散宜生などにより、呂尚を推薦し、周に仕えた。(呂尚はどいうやって周に仕えたのかはいくつの説があり、定論はないが、一番有名なのは…呂尚は西伯が賢徳だと聞いて、渭という川でお釣りをすることで、西伯に会った。)呂尚は周に行つて、その功績また殷を倒すための謀略は、主に以下となる。

文王の時期…

一、周の実力を蓄積して隠す、殷紂を滅ぼす方針を作る。

二、慎んで紂との君臣關係を修復する。

三、公開的に殷紂との君臣関係を維持する当時に、国内で暗中に殷を克するための準備をする。

四、戦備をすると同時に周りに同盟を求めらる。

五、「西伯」の名で、計画的に殷に従わない国を討伐する。

以上の五つで、周密な策により、軍事征伐が順調に進み、牧野の戦いの時までは、周の勢力範囲は朝歌に近づいた。

武王の時期…

一、滅商の戦において、総帥に傑出して務めている。

二、王朝交替にあたり、新政を出し、国を安定させる。

三、武王を補佐する国の監護者である^[81]。

以上の三つで、呂尚は優れた才能で、新しくできた国である周を繁栄させた。

呂尚は間であることについて…

この点については、史料にほとんど記されていない。ただ、呂尚は長年殷に住んでいたことは事実だと言える。この間、農民、商人、漁師などを沢山体験した。これにより、朝歌に関する事は沢山知られる。故に、後の戦争に大きく作用しただろう。

以上より、伊尹と呂尚は間諜であるという決断はしかねるが、向こうの情報を把握した(特に伊尹)ことにより、戦争に勝ったことは事実であろう。

③『万川集海』原文…卷一・忍術問答・P510 (『完本「万川集海」』)

「兵法曰微乎々〃無所不用間」

現代語訳：P51 (『完本「万川集海」』)

兵法を学ぶ者で間者を使わない者は存在しない。

『孫子』原文…(用間)

「微哉、微哉、無所不用間也、」

比較…

『孫子直解』…嘆其微之又微妙之又妙也。夫將與間不可相疑將疑間有覆舟之禍間疑將有害已之計。(大意…微であり、妙であり、將と間には疑がなくあるべき、將は間を疑すれば全滅になれ、間は將を疑すれば害を及ぼされる。)

『宋本十一家注孫子』…杜牧曰言每事皆須先知也。梅堯臣曰微之又微則何所不知。王皙曰丁寧之當事事知敵之情也。張預曰密之又密則事無巨細皆先知也。(大意…杜牧曰…すべて先を知るべし。梅堯臣曰…微小な事にも注意すればなんでも知られる。王皙

曰…相応しい丁寧とは敵のすべてを知ること。張預曰…機密で何でも先を知る。)

主に二つの解釈がある。①疑を持たなく間を使う。②すべてのことを先に早く知っておく。『万川集海』では、これを引用して、常に間諜を用いて、すべてを知るという主張が説かれている。この文は頻繁に引用された。

④『万川集海』原文…卷一・忍術問答・P511（『完本「万川集海」』）

「兵書曰不在聖智不能間不在仁義不能使間不在微妙不能得間之實矣」

現代語訳…P52（『完本「万川集海」』）

君主に聖人の智が無ければ間者を用いることはできなく、仁儀が無ければ間者を使うこともできない。

『孫子』原文…（用間）

「非聖智不能間、非仁義不能使間、非微妙不能得間之實、」

比較…

将は賢明、仁義を持たなければ、間が上手く使えない。間は微妙であることが認識されなければ、その実が得られない。将に対して、この覚悟がとても重要である。『万川集海』では、忍術問答の最後にこれを引用して、将の重要性を強調している。これに基づいて正心、将知の編を展開する。

⑤『万川集海』原文…卷四・将知一・P32（『完本「万川集海」』）

「孫子曰明君賢將以上智為間ト必為大功」

現代語訳…P67（『完本「万川集海」』）

明君、賢將は上智を以て間と行動するなら必ず大功成る。

『孫子』原文…（用間）

「故明君賢將，能以上智為間者，必成大功，此兵之要，三軍之所恃而動也、」

比較…

『孫子直解』…故明哲之君賢徳之將能以上智之士為間于敵者必成大功此兵之要三軍之所以倚恃而動也。（大意…賢將は上智者を間者にしていたら必ず大功を遂げる。これは兵の要で全軍はことを以て動く）

『孫子書校解引類』…言反間至重當以上智者爲之。上智為間則能得敵之情而不受敵之佞。（大意…反間は一番重要で、上智者とすべき。上智者を間にして敵の実情を知り、敵の陰謀を避ける）

上智者というのは賢明で知恵ある者。このような間者を使うことで、大功を遂げる。将だけが賢明であれば、物足りず、間諜は自身もそうでなければならぬ。これは千里

馬と伯樂の関係と同じである。『万川集海』では、此処は將と忍者のあるべき関係について説明しているため、特に問題がない。

⑥『万川集海』原文：卷四・将知一・P532（『完本「万川集海」』）

「孫子曰地形者兵之助也料敵制勝計險阨遠近上將之道也知此而用戰者必勝不知之而用戰者必敗ル」

現代語訳：P39（『完本「万川集海」』）

地形は兵の味方である。名將はその險阻遠近を計って作戦で敵を倒すのが常である。

これを心得ている者は勝ち、心得ていない者は負ける。

『孫子』原文：（地形）

「夫地形者、兵之助也。料敵制勝、計險阨遠近、上將之道也。知此而用戰者、必勝；不知此而用戰者必敗。」

比較：

地形篇から引用された。地形篇は主に地形について、その種類、特徴、又重要性などを論じている。『万川集海』では、忍びは戦争前に敵地に忍び込み、地形を暗記し、地図を描く。地図があれば、助けになる。このことが前の文章に書いてあるため、引用に適していただろう。

⑦『万川集海』原文：卷四・将知一・P532（『完本「万川集海」』）

「又曰不知山林險阻沮澤之形者、不能行軍」

現代語訳：P68（『完本「万川集海」』）

山林の險阻さや沢の峻緩を知らずに軍を送ってはならない。

『孫子』原文：（九地）

「是故不知諸侯之謀者、不能預交、不知山林險阻沮澤之形者、不能行軍、不用鄉導者、不能得地利、此三者不知一、非霸王之兵也。」

比較：

引用⑥のすぐ後に書かれている。山林、川、湿地などの状況がわからない場合では、軍を動かしてはならないという意味で、地形のことを指している。ただし、この文は地形篇でなく、九地篇である。

⑧『万川集海』原文：卷四・将知一・P533（『完本「万川集海」』）

「孫子曰為兵之事也在順詳二敵ノ意合力一向千里ニメ殺將、是謂巧ミ能成事」

現代語訳：P58（『完本「万川集海」』）

軍事は、微に入り細を穿って敵の作戦を利用し、時が来たら一丸となつてただ一目散に千里を走るように一気に敵将を殺す。これこそ巧にして能く事を成す者である。

『孫子』原文：（九地）

「故為兵之事，在于順詳敵之意，併力一向，千里殺將，是謂巧能成事。」

比較：

『中国歴代兵書集成』…故に、兵を持ち、作戦するのは、慎んで敵の意図を考察してから兵力を集中して攻撃し、千里でも、敵将を捉えることである。これもいわゆる謀略を巧みに活かし、敵を打ち取ることである。

『孫子書校解引類』…詳張賁作伴是也順奉順之也。（張賁により「詳」は「伴」とされている、「順」は従うとされている。）

この文の元の意味は謀により、敵を倒すというのであるが、事前に知っておくことを指していない。だが、ここで引用されたのは、忍びを用いることで、敵の状態を事前に知り、巧みな戦略を立てるということである。

⑨『万川集海』原文：卷四・将知一・P534「完本『万川集海』」）

「孫子曰出其所不趨力趨其所不意行千里而不勞者行於無人之地攻而必取者ハ攻其ノ所不守也。」

現代語訳：P59（『完本「万川集海」』）

趨かざるその所に出でて、意わざるその所に趨く。千里を行きて勞せざるは、無人の地を行きて攻め、守らざるその所を攻めるなり。

『孫子』原文：（虚実）

「出其所不趨，趨其所不意；行千里而不勞者，行于無人之地也；攻而必取者，攻其所不守也。」

比較：

忍びを用いて、敵の不備のところへ入り、情報をとり、これを以て、勝利をもたらすということである。ここでの引用は相応しい。

⑩『万川集海』原文：卷四・将知一・P535（『完本「万川集海」』）

「孫子曰親フメ而離之亦曰伐交」

現代語訳：P59（『完本「万川集海」』）

親しくしてこれを離す、交わりを伐る。

『孫子』原文：

「一、兵者、詭道也。故能而示之不能，用而示之不用，近而示之遠，遠而示之近。利而誘之，亂而取之，實而備之，強而避之，怒而撓之，卑而驕之，佚而勞之，親而離之。攻其無備，出其不意，此兵家之勝，不可先傳也。」（始計）

「二、故上兵伐謀，其次伐交，其次伐兵，其下攻城（謀攻）」

比較：

忍びを敵方に潜入させ、讒言で敵の和を碎き、隙を作る。故に「親而離之」。また敵と隣国の関係を攪乱し、外交の手段で、利をもらう。故に「伐交」。

⑩『万川集海』原文：卷四・将知一・P335（『完本「万川集海」』）

「孫子曰上兵伐謀」

現代語訳：P39（『完本「万川集海」』）

優秀な兵は謀略を以て伐。

『孫子』原文：（謀攻）

「故上兵伐謀，其次伐交，其次伐兵，其下攻城。」

比較：

忍びを用いて、敵の隠謀密計を聞き取る。敵の作戦を把握しておけば、容易に勝利できる。『孫子』の「謀」は具体的に指すことはなく、敵と比べ、深く考え、敵の意図などを明らかにする。それから、謀略で敵の作戦を破壊し、敵を敗北させる。これが「伐謀」という。

⑪『万川集海』原文：卷四・将知一・P336（『完本「万川集海」』）

「孫子曰微哉々無所不用間明君賢將所以動而勝人成功出于衆者先知也先知者不可取於鬼神不可象於事不可驗於度必取於人而知敵之情者也五間俱二起莫知其道是謂神紀人君ノ宝之是兵也要三軍所倚テ而動也、」

現代語訳：P70（『完本「万川集海」』）

明君名將は動くとき勝ち、そして大功をたてる。愚将との違いは、名將はまず敵を知るという点である。それは鬼神に祈ったり、先入観をもったり、回数を重ねるだけでは駄目である。明君名將は必ず人を使って敵情を知るのである。

『孫子』原文：（用間）

「微哉，微哉，無所不用間也。故明君賢將，所以動而勝人，成功出于眾者，先知也。先知者，不可取于鬼神，不可象于事，不可驗于度；必取于人，知敵之情者也。五間俱起，莫知其道，是謂神紀，人君之寶也。故明君賢將，能以上智為間者，必成大功，此兵之要，三軍之所恃而動也。」

比較..

この内容は多数に合わせて引用された。

『中国歴代兵書集成』..

微妙、微妙！いつ、どこでも間諜を使わなくてはいけない。故に明智な君主、賢明な将軍は動かしたら必ず勝ち、その功績は大衆より遙かに超えることは、事前に敵を調査し、敵情を把握することである。事前に敵を知るには、鬼神に祈ったり、占ったり、経験に基づいて推測したり、日月星の位置と度数により計算したりすることではなく、必ず敵情を知っている人から敵情の虚実を把握してもらわなければならない。

五つの間諜を同時に使い、十分に作用を活かすれば、味方の意図が隠され、敵を迷わせる。これが神紀じんぎと言い、國君の宝である。

故に明智な君主、賢明な将軍は上智ある者を間諜として使ったら、必ず大功をとる。これが兵の要であり、軍隊全体も間諜の提供した情報により、相応しい行動をとるわけである。

用間の大切さ、重要性が説かれている。間諜がいなければ、ほとんど失敗になる。忍びも同じく、非常に重要な存在である。

⑬『万川集海』原文..卷四・将知一・P536 (『完本「万川集海」』)

「孫子曰相守數年以爭一日之勝而愛爵祿百金不知敵之情者不仁之至也非人之將也非主之佐也非勝之主也」

現代語訳：P71 (『完本「万川集海」』)

何年も対峙しているのに、昇級や法外の褒美を求めて一日だけの勝を争う例もある。敵の情報に疎いのは将の仁徳が部下に行き届いていない証だ。これでは部下の上に立つべき資格もなく、主君の助けにもならない。

『孫子』原文.. (用間)

「孫子曰..凡興師十萬，出征千里，百姓之費，公家之奉，日費千金，内外騷動，怠于道路，不得操事者，七十萬家，相守數年，以爭一日之勝，而愛爵祿百金，不知敵之情者，不仁之至也，非人之將也，非主之佐也，非勝之主也。」

比較..

⑫の後にすぐ付いている、「孫子」の元の意味として、事前に敵情を知るのが大変重要であること。つまり用間を上手に使うこと。ここには特に問題がない。

⑭『万川集海』原文..卷五・将知二・P538 (『完本「万川集海」』)

「孫子曰用而示之不用」

現代語訳：P73（『完本「万川集海」』）

間者を用いても、用いた事を悟られないようにすべきである。

『孫子』原文：（始計）

「兵者、詭道也。故能而示之不能，用而示之不用，近而示之遠，遠而示之近。利而誘之，亂而取之，實而備之，強而避之，怒而撓之，卑而驕之，佚而勞之，親而離之。攻其無備，出其不意，此兵家之勝，不可先傳也。」

比較：

『七書直解』…本用其人而示敵以不用。（その人を用いるが、敵に用いないように見せる）。忍びは隱密性が高いため、常にばれないように行動すべきで、將軍もこの点について心掛けるはずである。

⑮『万川集海』原文：卷五・将知二・P538（『完本「万川集海」』）

「孫子曰事莫密於間」

現代語訳：P73（『完本「万川集海」』）

用間以上の秘密は他にはない。

『孫子』原文：（用間）

「故三軍之事，親莫親于間，賞莫厚于間，事莫密于間，非聖智不能用間，非仁義不能使間，非微妙不能得間之實。」

比較：

何のことも、間諜より秘密のものはない。

*この引用のすぐあとに、『十一家注孫子』の引用もあり、すなわち「出口入耳将与間聞知其事而已」。これは元々別の文だが、引用の際に一つの文にした。

「杜牧曰出口入耳也『密』一作『審』」…杜牧曰…口で話したら、他人の耳に入る。

密は「審」ともされている。（「審」…謹慎、慎む）

「張預曰惟將與間得聞其事非密與」…張預曰將と間だけはその事が聞けるから、秘密ではないか。

忍びの秘密性が説かれているため、疑問ない。

⑯『万川集海』原文：卷五・将知二・P538（『完本「万川集海」』）

「孫子曰有間事未発而先聞者則聞卜与所告者皆死」

現代語訳：P73（『完本「万川集海」』）

間者の事がまだ知られていないのに其の事を聞く者があれば、聞く者と告げた者とを即刻殺せ。

『孫子』原文…(用間)

「間事未發而先聞者，間與所告者皆死。」

比較…

機密情報が漏れたら、軍隊は勿論、国にも被害を及ぼすので、厳しく処理しなければならない。

『宋本十一家注孫子』…梅堯臣曰殺間者惡其泄殺告者滅其言。(梅堯臣曰…間者を殺すのは機密情報を漏らしたのであり、被告者を殺すのはこれ以上で、他の人に情報を漏らさないためである。)

矛盾がない引用であろう。

⑩『万川集海』原文…卷五・将知二・P515 (『完本「万川集海」』)

「孫子非聖者不能知間ノ實」

現代語訳…P79 (『完本「万川集海」』)

主君が聖智でなければ、間者の実際を知る事は出来ない。

『孫子』原文…(用間)

「故三軍之事，親莫親于間，賞莫厚于間，事莫密于間，非聖智不能用間，非仁義不能使間，非微妙不能得間之實。」

比較…

完全引用でなく、別の文と合わせて、一つの文を作った「忍者可召仕次第ノ事」の所に引用されている。全部十件の事で、これを見極めるのに、主君に必ず知恵深く賢明である人を要求する。故に非聖者不能知間ノ實。

⑪『万川集海』原文…卷七・将知四・P510 (『完本「万川集海」』)

「孫子曰形兵之極り至於無形則深間不能窺智者モ不能謀」

現代語訳…P86 (『完本「万川集海」』)

兵の形が理想の極みであれば無形となり、無形であれば有能な間者であっても偵察不能であり、智者であっても謀略がかなわない。

『孫子』原文…(虚実)

「故形兵之極，至于無形；無形，則深間不能窺，智者不能謀。」

比較…

『中国歴代兵書集成』…故に敵に形を示す手段は無限である。最高の境界は無形である。無形であれば、深く隠れている間諜でもわが虚実がわからず、智者でも相応しい謀略がたてられぬ。

敵忍にわからないように軍評判や備定などをする方法で、重要なのは命令に従うことだと説かれている。士卒は将の下知を直ちに素直に従うことから、隙が少ないといえる。

『万川集海』では、「孫子」と違い、常に具体的な内容を書いているが、ここでの引用もそうである。矛盾とはいえないが、理論に従い、具体的なやり方を説明している。

⑭『万川集海』原文：卷八・陽忍上・P500（『完本「万川集海」』）

「孫子曰善戦者無智名無勇名」

現代語訳：P95（『完本「万川集海」』）

善戦する者に知名無く勇名なし。

『孫子』原文：（軍形）

「古之善戦者，勝于易勝者；故善戦者之勝也，無智名，無勇功。」

比較：

『万川集海』では、「平素から名前と技術を秘匿しておく事」と述べられ、忍び（使われる手）に要求する。すなわち、忍びはどんな時期にも関わらず、常に自分が忍びであることを隠れておき、いざとなると、密かに大功を遂げて、名を残さないという。これこそが著者に提唱されていることである。

しかし、『孫子』においては、これが將軍のこと（或いは主君、使う手）を言っている。現代語訳ですと、

『中国歴代兵書集成』：昔、戦争に長けると言われる人はいつも容易く敵に勝つと見える。それで、戦争に長ける人の勝利は、知恵の名声はなく、武勇の戦功もない。

つまり、能く戦う將軍は戦争を起こすたびに簡単に勝たれるため、目立たないで済む。それで智名、勇功などもない。

両方は対象が違うが、『万川集海』のほうが間違ったとは言えない。『孫子』の理論を参考にして、新に忍びに要求するというのも考えられる。

⑮『万川集海』原文：卷八・陽忍上・P502（『完本「万川集海」』）

「孫子曰始二ハ如處女後二ハ如脱兔敵不及拒」

現代語訳：P97（『完本「万川集海」』）

始めには処女の如く、後には脱兔の如く、敵拒むこと及ばず。

『孫子』原文：（九地）

「是故始如處女，敵人開戸，後如脱兔，敵不及拒。」

比較：

『中国歴代兵書集成』…決戦の前に処女のように沈着し、後は逃げ出した兎のように迅速に行動することで、敵を迷わせ抵抗できなくなる。

この部分はいくノ一のことを述べている。男が難しい場合には「くノ一」を利用して、敵が思えないことで、任務を達成する。故に「始ニハ如處女後ニハ如脱兔敵不及拒」のようである。

②『万川集海』原文…卷八・陽忍上・P567（『完本「万川集海」』）

「孫子曰非聖智不能用於間非仁義不能使於間非微妙不能得於間之實三軍之事莫親於間賞莫厚於間事ハ莫密於間」

現代語訳…P100（『完本「万川集海」』）

將は聖知でなければ間者を使う事は叶わず、仁義が無ければ間者を使う事も出来ない、心細やかでなければ間者を使う事は出来ない。全軍に対しても、間者ほど直接影響を及ぼす者はなく、褒賞も間者ほど厚い者もなく、事の中味は間者より密接であるものはない。

『孫子』原文…（用間）

「故三軍之事，親莫親于間，賞莫厚于間，事莫密于間，非聖智不能用間，非仁義不能使間，非微妙不能得間之實。」

比較…

重複して引用されているが、ここは、恩賞が少ない者を間諜として用いる場合における將軍のやり方についての具体的な説明である。「非聖智不能用於間」「非微妙不能得於間之實」にふさわしいだろう。

②『万川集海』原文…卷八・陽忍上・P568（『完本「万川集海」』）

「孫子曰反間者因其敵間而用之又曰必索敵人之間之來間我者，因而利之導而舍之故反間可得使也因是而知之故二郷間内間可得而使也因是而知之故二死間ハ為誑事可使告敵因是而知之故生間可使如期五間之事主必知之知之必在反間故反間不可不厚」

現代語訳…P102（『完本「万川集海」』）

反間はその敵間によってこれを用いる云々。敵の間者が来て味方を偵察する者を捕まえ、それに利を与えて反間にし、味方として留めて置く。これで反間が出来たので、今度はこの反間を使って敵の様態を知る事になる。また、この反間の人間関係で敵の住民を郷間とし、官人は内間として使う事が出来る。郷間、内間から敵状を知り得るので、今度は死間を送り込んで敵に偽の情報を流す。さらに得られる情報も増えて敵状の詳細

を知り、仕上げは生間を好機に使うことになる。君主は五間の使い方の方が心得が必須である。將軍は、反間が最重要である事を理解し、厚遇しなければならない。

『孫子』原文…(用間)

「反間者、因其敵間而用之。必索敵間之來間我者、因而利之、導而舍之、故反間可得而使也。因是而知之、故郷間内間可得而使也；因是而知之、故死間為誑事、可使告敵；因是而知之、故生間可使如期。五間之事、主必知之、知之必在于反間、故反間不可不厚也。」
比較…

天唾術とは天に向かって唾を吐けば唾が自分に落ちると同じで、敵から味方に入った忍者が、かえって敵の害になることと現代語訳で書かれている。天唾術は「五間」の「反間」にあたる。引用された内容だが、反間の意味、そして反間の重要性についての事であるため、相応しい。

②『万川集海』原文…卷八・陽忍上・P570 (『完本「万川集海」』)

「孫子曰兵者詭道也故能而示之不能用而示之不用近而示之遠遠而示之近」

現代語訳…P103 (『完本「万川集海」』)

兵者は詭道(人を欺いて進道)なり、故に能くても能くないように振る舞い、用いても用いないようなふりをする。近づいても遠ざかるように示し、遠ざかっても近づくように振舞う云々。

『孫子』原文…(始計)

「兵者、詭道也。故能而示之不能、用而示之不用、近而示之遠、遠而示之近。」

比較…

敵忍が味方の城陣に忍び込んで堀下の石塁辺りに来たら、気づかないふりをして味方の計略事などを偽り話でさりげなく聞かせ、敵忍を味方の忍者として利用する。これも「反間」と言えよう。それから、趙奢が敵の間者に間違った情報を持たせ、敵を敗北させる事を例にして挙げ、それからこの引用が出た。

『中国歴代兵書集成』…兵を用いて戦争をすることは常に変幻する詭詐の事である。故に戦いを始めようとするときに味方が弱くて戦争できないふりをし、兵を用いて行動しようとするときに用いないふりをし、近くで行動しようとする時に遠くで行動するふりをし、遠くで行動しようとする時に近くで行動するふりをする。

忍びの使い道も詭道と言えらるだろう。

②④ 『万川集海』原文：卷九・陽忍中・P173（『完本「万川集海」』）

「孫子曰凡軍之所欲擊城之所欲攻人之所欲殺必先知其守將左右謁者門者舍人之姓名令吾間必索知之」

現代語訳：P106（『完本「万川集海」』）

敵軍を討つ時、敵城を攻撃する時、そして敵要人を殺す時必ずまずその將の側近、取次人、門番、舍人〔高官付きの雑務係〕の姓名を知り、間者を放ってこれらを索知させる。

『孫子』原文：（用間）

「凡軍之所欲擊，城之所欲攻，人之所欲殺；必先知其守將，左右，謁者，門者，舍人之姓名，令吾間必索知之。」

比較：

『中国歴代兵書集成』…凡そすべての攻めようとする敵軍、城池、必ず消滅する敵の人員、我が方は必ず事前に敵の將軍、その心腹、來客の接待をする官員、當番、謀士などの人の名前を知っておき、これらの情報を我らの間諜に全面的に間違ひなく把握させると命じる。

『万川集海』…

畧本術七箇条

一、敵ノ城陣ノ様体ハ不及言ニ敵方ノ老中物頭奉行近習又ハ出頭人或ハ軍者奏者使番等ノ姓名又居宅ノ在所ハテ能々尋問ヒ識スベキ也。

ほぼ同じの内容なので、問題なし。

②⑤ 『万川集海』原文：卷十・陽忍下・P193（『完本「万川集海」』）

「孫子曰仗而立者飢也」

現代語訳：P193（『完本「万川集海」』）

杖で立つ者は餓えている。

『孫子』原文：（行軍）

仗而立者，飢也。

比較：

『万川集海』では、敵の飢えて疲れた様子を察することについて、引用された。

城陣を外から窺う十か条

九、敵は気持ちちが弛んで締まりがないのか、飢えて疲れたのかを見る事。

『宋本十一家注孫子』…杜佑曰依仗矛戟而立者，飢之意。（杜佑曰：杖、矛戟などに偏って立つ者は飢えている）

『中国歴代兵書集成』…敵兵が拄杖をして立つのは飢える意味である。

周りの草木、城中の煙、馬のいなきなどにより、敵が飢えているのを判断する。

最後に「仗而立者飢也」と引用して、信憑性を高くし、一つの方法としても勉強すべきである。疑問点がない。

②6 『万川集海』原文…卷十・陽忍下・P595（『完本「万川集海」』）

「孫子曰有險阻潢井蒹葭林木翳蒼者必謹覆索之此伏姦之所也」

現代語訳…P126（『完本「万川集海」』）

險阻、水溜り、葦、森林、草木の茂みがある所は必ず丁寧にこれを搜索せよ。伏姦の居る所である。

『孫子』原文…（行軍）

「軍旁有險阻、潢井、蒹葭、林木、翳蒼者、必謹覆索之、此伏姦之所也。」

比較…

『万川集海』…

伏蟠の有無を見分ける五箇条

一、伏蟠が隠れ居る場所は森、林、藪、谷合、山影、堤の裏、溝川の中、葦の茂みの中、深野、麦畑などである。

それから、『孫子』の引用がある。伏兵がある場所の紹介として、とても相応しい。

②7 『万川集海』原文…卷十・陽忍下・P595（『完本「万川集海」』）

「孫子曰鳥起者伏也」

現代語訳…P126（『完本「万川集海」』）

鳥が飛立つ時は伏兵がいる。

『孫子』原文…（行軍）

「鳥起者、伏也。」

比較…

これがとても有名だが、鳥の様子により、伏兵の有無を判断する。疑問なし。

②8 『万川集海』原文…卷十・陽忍下・P595（『完本「万川集海」』）

「孫子曰獸駭者覆也」

現代語訳…P126（『完本「万川集海」』）

獸が驚くのは伏兵なり。『孫子』原文…（行軍）

『孫子』原文…（行軍）

「獸駭者，覆也。」

比較…

これも伏兵についての内容だが、伏兵が来ると、山野の獣は驚かされ、必ず走出る。伏兵の判断方法ということで特に疑問はない。

⑳『万川集海』原文…卷十一・陰忍上・P616（『完本「万川集海」』）

「孫子曰無約而請和者謀也」

現代語訳…P133（『完本「万川集海」』）

約無くして和を請うは謀なり。

『孫子』原文…（行軍）

「無約而請和者，謀也。」

比較…

現代語訳の本文をあげる…

「十四、敵が和を請う時は実と計とを考えて大将と評議を重ねて対応する事。

敵を討つと思う時は、必ず心が揺れ動く。だからその動揺を見破る目利きが肝要である。『孫子』に「約無くして和を請うは謀なり」とある。」

引用された内容は一つの注意点として、参考になるだろう。

㉑『万川集海』原文…卷十一・陰忍上・P619（『完本「万川集海」』）

「孫子曰朝氣ハ鋭昼ノ氣惰暮氣ハ歸避其鋭ノ氣擊其惰氣」

現代語訳…P135（『完本「万川集海」』）

朝氣は鋭、昼の氣は惰、暮氣は歸。其の鋭氣を避けて其の惰氣を撃つ。

『孫子』原文…（軍争）

「是故朝氣鋭，晝氣惰，暮氣歸；故善用兵者，避其鋭氣，擊其惰歸，此治氣者也。」

比較…

これが惰氣に入る術八箇条の所での引用である。

本文において、「此語軍法ノ事ノミニメ忍者ノ用ニ非ヌナド心得テ必スユルカセニスル 忽 一」ま

た「鋭」「惰」「歸」について、ただいだけで、その解釈はない。

引用された内容は実に忍びとはあまり関係ないと著者はわかっているが、人の「鋭」

「惰」「歸」はどうやって分かるだろう。或は最初は始まるため「鋭」である、それから「惰」、最後は「歸」であると理解するのはよいだろう。また「鋭」「惰」「歸」

という理論は『万川集海』では他の所にも触れている。

まとめ

以上の三十箇条は『孫子』からの引用であり、『万川集海』において、最初の序から、卷十一まで、幅広く引用されたことで孫子思想に強く影響されたといえる。例えば、忍者の隠密性から「兵は詭道なり」、「よく戦う者の勝つや、智名なく、勇功なし」。忍者はできるだけ戦いを避けることから「上兵は謀を伐つ」「戦わずにして人の兵を屈するは、善の善なるものなり」など。

なお、この三十の引用の中には「用間篇」が一番多く、十一あり、「用間篇」の内容も殆ど引用された。「五間」の「郷間」、「内間」、「反間」、「死間」はすべて陽忍の術にあたる^①。「生間」は生き返って情報を出すことで、任務を遂げて戻る忍者にあたる。

現代語訳の箇所は特に問題がない。『孫子』は中国国内だけでなく世界でも有名な兵法書の一つであるから、『万川集海』では『孫子』からの引用が最も多い。その内容からみると、著者は十分『孫子』を読んでよく理解したうえで、参考にして『万川集海』を書いたと推測する。ある所は少々不自然かもしれないが、『孫子』の全体引用からみると、特におかしくない。

忍びは日本独自の職業と文化であることは事実である。ただしその起源については、『孫子』が一番古い。初めて「間」について論じた兵法書であり、『万川集海』のほかに、いくつかの忍術書にも「五間」を多く引用したことから、『孫子』は忍びの起源といえるだろう。時代に合わせて『孫子』の影響とともに、独自の発展を遂げた忍者は、『万川集海』において、陽忍の他、高い暗殺技術を持つ陰忍も存在し、これらの陰忍は（または忍器）『孫子』にはない。『孫子』全篇において、ほとんど使う手に用いる兵法であり、理論的な謀略が多いのが特徴である。それに対して『万川集海』においては、使われる手すなわち忍者に具体的なやり方を説明するのが特徴である。またこの具体的なやり方は『孫子』の理論に強く影響されたとみなされる。『万川集海』では、ただの引用ではなく、この引用の道理をも考え、その道理に従い、ふさわしい行動あるいはやり方が説かれている。このほかに、『孫子』は君主と将に要求することと違い、『万川集海』は忍者に強く「正心」（仁義忠信）を求めることにも注意したい。

〈第三節〉『六韜』

『六韜』は、中国の代表的な兵法書で、武経七書の一つである。このうちの『三略』と併称される。「韜」は剣や弓などを入れる袋のことで、秘訣を意味している。一卷に「文韜」「武韜」、二巻に「龍韜」「虎韜」、三巻に「豹韜」「犬韜」の六〇編から成り、全編は太公望呂尚が周の文王・武王に兵学を指南する設定で構成されている。中でも「虎の巻（虎韜）」は、兵法の極意として慣用句にもなっている。

一九七二年、山東省銀雀山において前漢代(B.C. 206〜8)の墳墓から現行本『六韜』の一部が竹簡として出土した。『六韜』の原形が、戦国時代末期から前漢代にかけてすでに成立していたことは間違いないところである。兵法書としての『六韜』は、呂尚に仮託して、後世の人が書いて、後漢代に完成したものであろう。

日本では、朝廷の書物を管理していた大江維時が一〇世紀初めの九三〇年頃、唐から『六韜』『三略』および『軍勝図』（諸葛亮の八陣図）を持ちかえったが、これらの兵書を「人の耳目（じもく）を惑わすもの」とし、大江家にのみ伝え、他家に秘して、しばらくの間は広まらなかったとされる（大江家が兵書を伝えたのは、古代では天皇の勅命でやむをえずの場合）。このほか、源義経が陰陽術師の鬼一法眼から譲り受けたという伝説や、大化の改新の際に中臣鎌足が暗唱するほど読み込んでいたという言い伝えが残っている^[10]。『万川集海』において、『六韜』からの引用は全部で六箇条である。

①『万川集海』原文…卷四・将知一・P524（『完本「万川集海」』）

「六韜曰是以疾雷不及掩耳迅電不及瞑目」

現代語訳：P69（『完本「万川集海」』）

疾雷に耳を覆う必要なく、迅電に目を閉じる必要もない。

『六韜』原文…（龍韜軍勢）

「善者，見利不失，遇時不疑。失利後時，反受其殃。故智者從之而不釋，巧者一決而猶豫。是以疾雷不及掩耳，迅電不及瞑目。」

比較…

『孫子』引用の⑨のすぐあと、この引用がある。

現代語訳での意味だが、少々理解しにくいかもしれないが、元の意味は…

『中国歴代兵書集成』…よく作戦できる者は有利の状況が見つかると決して手放さない、有利の機会があると決して躊躇しない。もし機会を失って時機に外れれば、かえって自分に害をもたらす。故に機智の人は戦機をしっかりと掴んで決して手放さない、知恵

の人はことを決めたら決して躊躇しない。(故に戦争の時には動きは)突然の雷のように耳を覆う暇がない、走りの電のように目を閉じる瞬間もない(ように速くすべきである)。

忍びを用いて、敵の不意不備のところに忍び込んで、躊躇せずに素早く行動する。この点は重要だと著者が強調している。

②『万川集海』原文…卷五・将知二・Page (『完本「万川集海」』)

「太公ノ曰諸有隱事大慮當用書不用符主以書遣將將以書問主書皆一合シテ而再離シ三發シテ而一知ス再離ト者分書為三部三發メ而一知スルト者言ハ三人ゴト二人操一分相參而不使知情也此ヲ謂陰書敵雖聖知莫之能識」

現代語訳…P74 (『完本「万川集海」』)

隠し事への配慮は書にすべきで、割り符にしてはならない。主君は書で将に伝達し、将は書で質問すべきである。皆が集合し、書を再離して分け持ち、三発して一知する。「再離」とは書を三片に分けることであり、「三発して一知する」とは三人に各一片を手渡すので三人がそれを持ち寄って初めて情報を知ることが出来る、という意味である。これが隠書であり、敵が聖智であつても解読する事は出来ない。

『六韜』原文…(龍韜陰書)

「太公曰…諸有陰事大慮、當用書、不用符。主以書遣將、將以書問主。書皆一合而再離、三發而一知。再離者、分書為三部。三發而一知者、言三人、人操一分、相參而不知情也。此謂陰書。敵雖聖智、莫之能識。」

比較…

これが「隠書」のところに引用されたが、隠書のやり方として、紹介する。現代語訳のところには問題なし。「當用書、不用符」について、この「符」は確かに「八符」を指している。「八符」は『六韜・龍韜陰符』に書かれている。著者はこの後なぜ符を使わないのかという理由も書いており、特に問題がない。『六韜』の「陰書」のはじめのところにその理由も書かれている。

六韜の原文…「引兵深入諸侯之地、主將欲合兵、行無窮之變、圖不測之利。其事煩多、符不能明。」(龍韜陰書)

『中国歴代兵書集成』…軍を率いて、敵国に深く進行する場合、國君と將軍は兵を集め、敵情により、靈活の作戦をし、敵の不意のところから勝利を取ろうとするが、事情が複雑また繁多で、陰符では事情の説明ができない。それで、陰書を使う。

③『万川集海』原文：卷八・陽忍上・P560（『完本「万川集海」』）

「六韜曰鷲鳥將擊早飛斂翼猛獸將搏弭耳俯伏聖人將動必有愚色。」

現代語訳：P95（『完本「万川集海」』）

鷹がまさに攻撃しようとする時は、飛んでいても早く翼をおさめ、猛獣がまさに攻撃しようとする時は耳を倒して低く伏す。聖人がまさに動こうとする時は必ず愚人のように振舞う。

『六韜』原文：（武韜發啓）

「鷲鳥將擊，早飛斂翼；猛獸將搏，弭耳俯伏；聖人將動，必有愚色。」

比較：

同じのところに『六韜』と『孫子』の引用がある。（『孫子』引用の⑬を参照する。）

『中国歴代兵書集成』：鷲鳥は攻撃を發動しようとする時に必ず低い所からも翼をおさめ、猛獣は攻撃を發動しようとする時に必ず耳を倒して低く伏す。聖賢は行動をしようとする時に、先に必ず人に愚かな様子を見せる。

これにより、攻撃や行動をする前に慎んで自分の目的を隠すのが明智である。

著者は忍びが常に自分の正体を隠しているのを心掛けることを促している。これが明智であり、始計として、重要である。

④『万川集海』原文：卷八・陽忍上・P560（『完本「万川集海」』）

「老子大智無智大謀無謀」

現代語訳：P95（『完本「万川集海」』）

大智には智はなく、大謀には謀なし。

『六韜』原文：（武韜發啓）

「大智不智，大謀不謀；大勇不勇，大利不利。」

比較：（同じ場所で、複数引用の一つである、『孫子』引用の⑬と『六韜』引用の③を参照する。）

問題点だけ注目する。原文の「老子大智無智大謀無謀」について、まず『老子』（または『道德経』）には該当するものはない、『六韜』にあるが、字が少々違っているが、意味は同じである。原文の「老子」とは恐らく間違っていると推測する、正しいのは『六韜』だろう。

忍びは平素から名前と技術を秘匿する事と説かれている。忍者は動こうとするときに一般人になり、鷲鳥や猛獣のように行動すべきである。故に大智無智大謀無謀である。

⑤『万川集海』原文…卷十・陽忍下・P589（『完本「万川集海」』）

「六韜曰凡三軍悅懌ノ士卒畏法敬其將命相喜以破敵相陳以勇猛相賢以武威此強徵也三軍數驚士卒不齊相恐以敵強相語以不利耳目相屬妖言不止衆口相惑不恐法令不重其將此弱徵也」

現代語訳…P120（『完本「万川集海」』）

三軍の士卒が心底喜び、軍規を畏れ、將の命令を敬い、相喜んで敵を撃破し、皆勇猛で、武威を賢とするのは強い証拠である。一方、三軍の士卒が頻繁に驚き、個々ばらばらで、敵が強いと思いついで皆が恐れ、口を開けば不利と言ひ、耳目に妖言が惑わしい、軍規を恐れず、その將を尊敬していない等は弱い証拠である。

『六韜』原文…（龍韜兵徵）

「武王問太公曰…「吾欲未戰先知敵人之強弱，豫見勝負之徵，為之奈何？」

太公曰…「勝負之徵，精神先見，明將察之，其敗在人。謹候敵人出入進退，察其動靜，言語祿祥，士卒所告。凡三軍說懌，士卒畏法，敬其將命，相喜以破敵，相陳以勇猛，相賢以威武，此強徵也。三軍數驚，士卒不齊，相恐以敵強，相語以不利，耳目相屬，妖言不止，眾口相惑，不畏法令，不重其將，此弱徵也。」

比較…

敵の強弱を察知する三箇条

三、敵軍の勝敗は士卒の気持ちや言葉で察知する事

この部分の内容は全部引用の内容である。

『中国歴代兵書集成』…

武王は大公に問う…戦の前に敵の強弱を知り、勝敗の兆しを予測するにはどうすればいいか。

大公曰く…勝敗の兆しはまず敵軍の將士の精神面から表現され、明智の將軍は事前に察知できるが、この兆しを利用して敵を倒すか否かは人の主観努力によって決められる。よく敵の進出状況を注意し、その動靜を觀察する。話の中にある吉凶の兆しと士卒が話した内容に留意する。凡そ全軍が喜び合ひ、法令を恐れ、將軍の命令に従ひ、互いに敵をとるのを喜とし、勇猛で敵を殺すのを雑談とし、武威を誇りとするのが軍隊の戦闘力が強い兆しである、返つて、全軍が頻繁に驚き、士卒が混乱して列が乱れ、お互いに敵の強さを以て恐れ、作戦不利を伝え、流言が止まらなく、嘘で惑わせ、法令を恐れない、將軍を敬わないのが軍隊の弱い兆しである。

軍隊の精神面から、実の状況まで、よく觀察すれば、敵の強弱を判明することができる。忍びは敵の情報を取るには、軍隊全体を把握することがとても重要である。

この内容により、敵情を察知し、勝負を予測する。

⑥『万川集海』原文：卷十一・陰忍一・P621（『完本「万川集海」』）

「六韜曰三軍禍起狐疑」

現代語訳：P137（『完本「万川集海」』）

三軍の禍は狐疑より起る。「狐疑…狐は疑い深い性質であるところから、人のことを疑うこと」

『六韜』原文：（軍勢）

「故曰…無恐懼，無猶豫。用兵之害，猶豫最大；三軍之災，莫過狐疑。善者，見利不失，遇時不疑。失利後時，反受其殃。」

比較：

忍術の三病について…恐怖、敵を軽んじる、思案過ぎ。三病の説明の後にこの引用がある。

『中国歴代兵書集成』…故に恐怖はなく、躊躇もない。兵を用いる害は躊躇で、最大である。三軍の災は狐疑に及ぶものはない。善者は利を見つけて見逃さなく、時機があると躊躇もない。これに対して、利を失い、時機に外れたものは災いをもたらす。

総じて、忍者も気を付けなければならない事は時機を見逃さず、躊躇はなく素早く行動することである。三病のことを常に心掛けて行動すべきである。

まとめ：

全体の引用からみると、矛盾がなく特に問題がないと判明した。ただ、引用の①「六韜曰是以疾雷不及掩耳迅電不及瞑目」の現代語訳だが、「（故に戦争の時には動きは）突然の雷のように耳を覆う暇がない、走りの電のように目を閉じる瞬間もない（ように速くすべきである）」と訳したらよいだろう。要するに、（攻撃や戦争などの）速度の速さが強調されている。

また引用④のところだが、著者が間違って「六韜」を「老子」と書いたと推測する。

（『万川集海』では『老子』（道徳経）の引用もある）

〈第四節〉『三略』

『三略』は、中国の兵法書であり、「武経七書」のひとつである。『黄石公記』『黄石公三略』とも称される。上略、中略、下略の三つで構成され、そのため「三略」という。太公望が書き、神仙の黄石公が選録したとされる。しかし、内容には、殷や周の頃は戦車戦であるのに、まだ存在しないはずの騎馬戦の言及があり、同様に使用されない「將軍」という言葉も用いられているため、後世の人物が太公望や黄石公に仮託して書

いた偽書であるとも考えられている。牽強附会の由来とその内容とは別物であり、古から価値の有るものと見なされ、数多の兵書の中から選ばれて、神宗によって「武経七書」に加えられている。書き手が同じ太公望ということで、通常、『六韜』と併称される。

なお、日本の戦国武将の北条早雲は、「夫れ主将の法は、務めて英雄の心を攬り、有功を賞禄し、志を衆に通ず」という最初の一節を聞いただけで、兵法の極意を悟ったという（『甲陽軍艦』品第一一）。

成句「柔能く剛を制す」の出典である。名言として（後述書）、「智を使い、勇を使い、貪を使い、愚を使う」（智者・勇者はもちろん、貪欲者や愚者をも上手く使いこなす。指導者はどのような者でも使いこなす）がある^{三三}。

『万川集海』において、『三略』の引用は全部で六ヶ所ある。

①『万川集海』原文：卷二・正心一・p116（『完本「万川集海」』）

「軍讖ニモ柔能制剛弱能制強」

現代語訳：p16（『完本「万川集海」』）

柔よく剛を制し、弱よく強を制す。

『三略』原文：（上略）

「軍讖曰：柔能制剛，弱能制強。柔者，徳也。剛者，賊也。弱者，人之所助。強者，怨之所攻。柔有所設，剛有所施，弱有所用，強有所加，兼此四者，而制其宜。」

比較：

ここでは義理の勇と血気の勇との違いについてである。

義理の勇は柔軟であり、血気の勇は剛強であると説かれている。

『中国歴代兵書集成』…軍讖曰…柔は剛に克つ、弱は強に克つ。ふさわしい柔とは徳であり、ふさわしくない強は災いである。弱者は常に助けられるが、強者はいつも恨みを招致して攻められる。ある時は柔を用い、ある時は強を用い、ある時は弱を見せ、ある時は強を見せる。この四つを巧みに組合せて、時機、事により、ふさわしく運用するべきである。

『三略』では、具体的に何が柔、何が強というような説明はない。ただ、ある時に柔、弱はかえって剛、強に克つという道理を述べている。義理の勇とは冷静で弱そうとみえるが実に強い。血気の勇とは強そうと見えるが、怒りなどに支配されて実に弱い。だから、柔能制剛，弱能制強と言える。

②『万川集海』原文：卷四・将知一・P532（『完本「万川集海」』）

「三略ニモ智者ハ不為暗君謀」

現代語訳：P57（『完本「万川集海」』）

智者は暗君の為に謀らず。

『三略』原文：（中略）

「軍勢曰：使義士，不以財。故義者，不為不仁者死。智者，不為闇主謀。」

比較：

ここでは忍者は才能のない將軍に仕えるべきではないと説かれている。また千里馬と伯樂の例も挙げていて、將軍は忍者に対しての重要さを説いている。智將に仕えるべきであるが、愚將に仕えると、万事に失敗になる。故に智者ハ不為暗君謀である。

③『万川集海』原文：卷四・将知一・P533（『完本「万川集海」』）

「三略曰不為事先動テ而則隨」

現代語訳：P58（『完本「万川集海」』）

事を起こさず、まず動いてみると敵は反応して本意を表すので、それに対応する。

『三略』原文：（上略）

「端末未見，人莫能知。天地神明，與物推移。變動無常，因敵轉化。不為事先，動而輒隨。」

比較：

ここでは、「忍法の利得十か条・三、主將は開戦前の適切な兵の手配が重要である。」についてである。忍びを使って敵の陣取り、備定め、伏兵の有無などを探らせ、敵により、行動する。

現代語訳に意味がずれているところはある。

『中国歴代兵書集成』…事の始末はまだ現れないかぎり、人間はそれが認識できない。自然が神秘で常が変わって予測できない。敵情の変化により行動して、敵より先に動くべきではなく、敵の行動によりふさわしい対策を取るべきである。

すなわち、「まず動いてみる」ではなく、「動かない」との意味である。味方が動かなく、敵の動きを待って、対応する。

要するに、敵を知らないままに決して動かない、その敵情を十分把握したうえで、動くわけである。

④『万川集海』原文：卷四・将知一・P535（『完本「万川集海」』）

「三略曰非譎奇無以破奸息寇非陰計無以成功」

現代語訳：P70（『完本「万川集海」』）

謀略なくして悪敵を破り攻略できるはずもなく、戦は秘かに計って初めて成功する。

『三略』原文：（中略）

「故非計策，無以決嫌疑。非譎奇無以破姦息寇，非陰謀無以成功。」

比較：

これは、「忍法の利得十か条・十、忍術で敵将を殺すので、その利が甚大である」の所の引用である。

『中国歴代兵書集成』…故によく計画しない限り、惑いと疑問が究明できない。詭計などを使わない限り、敵を敗北させることができない。陰謀を使用しない限り、成功できない。

忍びを用いて、具体的にどうして敵将を殺すのかはわからないが、これが陰謀詭計の一つとして、納得できなくもない。

⑤『万川集海』原文：卷七・将知四・P550（『完本「万川集海」』）

「三略曰將ノ謀欲密將謀密則姦心閉」

現代語訳：P86（『完本「万川集海」』）

将は謀を極秘にし、極秘であれば姦の心は閉じる。

『三略』原文：（上略）

「軍讖曰：將謀欲密，士眾欲一，攻敵欲疾。將謀密，則姦心閉。士眾一，則軍心結。」

比較：

『孫子』引用の⑩と同じところにある。

敵忍にわからないように軍評判や備定などをする方法について、士卒は直ちに將軍の命令に従うことが重要である。

『中国歴代兵書集成』…軍讖曰：將軍の謀略は秘密にすべきで、士卒の意志は統一にすべきで、迅速に敵を攻撃すべきである。將軍の謀略を内密にすれば、反間は隙に乗れない。士卒の意志は統一すれば、全軍は団結になる。

將軍の命令に従えば、全軍が統一になり、將軍の謀略が本人しかわからないので、例え敵忍がいても、実情がわからない。故に「將謀密則姦心閉」であろう。

⑥『万川集海』原文：卷九・陽忍中・P574（『完本「万川集海」』）

「三略曰端未見人能無知天地神明與物推移變動無常因敵轉化」

現代語訳：P107（『完本「万川集海」』）

端の無い輪の様な動き、すなわち周期的な動きは人が気にかけない。例えば天地である。人智を超えた靈妙さで刻々と万物と供にはつきりと推移し変化しているのに、人は気付かない。用兵もこのように形を見せずに流動し、敵の動きに応じて変化しなければならぬ。

『三略』原文：（上略）

「端未未見，人莫能知。天地神明；與物推移。變動無常，因敵轉化。」

比較：

『三略』引用③を参照する。

「完本『万川集海』」の現代語訳（P107）には、この引用の解釈だが、中国の主流解釈と違っている。本論文では、中国の主流解釈を参考にする。即ち、③の訳である。

（『中国歴代兵書集成』『呉子訳注・黄石公三略訳注』）

これは略本術七箇条の六、陽術で近入をする時は敵が納得する言葉、考え方、動作などを前もって熟慮し、謀略を練っていくことである。

引用された内容の主な意味は、敵によって動くことである。

ここからみると、両方の主張が外れているようである。

ただし、忍びは敵の生活習慣を真似して、敵により、臨機応変をすることは一致するだろう。

まとめ：

「端未未見，人莫能知。天地神明；與物推移。變動無常，因敵轉化。」の現代語訳は意味がずれている。即ち引用の③と⑥である。他は特に問題がない。中国の兵法書において、理論が多いが、具体的なやり方などが少ない。これも『万川集海』との大きい違いである。

〈第五節〉『呉子』

『呉子』は、春秋戦国時代に著されたとされる兵法書で、武経七書の一つである。古くから『孫子』と並び評されていた。しかし著者ははっきりとしない。書中に登場する呉起またはその門人が著者であると言われるが、定かではない。内容は呉起を主人公とした物語形式となっている。現存している『呉子』は六篇だが、『漢書』「芸文志」には「呉子四十八篇」と記されている。非常に兵法に優れており、部隊編制の方法、状況・地形毎の戦い方、兵の士気の上げ方、騎兵・戦車・弩・弓の運用方法などを説いている。『孫子』と並び評される兵法書であるとされるが、後世への影響の大きさは『孫子』のほどではない。これは内容が春秋戦国時代の軍事的状況に基づくものであり、その後の時代では応用ができなかったのが原因であると言われる。逆に『孫子』のほうは、戦略や政略を重視しているため、近代戦にまで応用できる普遍性により世界的に有名になっている^[21]。

『万川集海』では、『呉子』の引用は一箇所だけある。

『万川集海』原文：卷十一・陰忍一・P618（『完本「万川集海」』）

「呉子必死則生必生則死」

現代語訳：P134（『完本「万川集海」』）

必死則生、必生則死

『呉子』原文：（治兵）

「呉子曰、凡兵戰之場、立屍之地。必死則生、幸生則死。其善將者、如坐漏船之中、伏燒屋之下、使智者不及謀、勇者不及怒、受敵可也。故曰：用兵之害、猶豫最大。三軍之災、生於狐疑。」

比較：

これは虚に入る術二十箇条の最後のところに引用された内容である。忍びは敵の虚に入り、時機により躊躇なく、必死の心で任務を遂行する。こうしなければ、敵に見つけられ、命も失う。故に必死則生必生則死という道理である。

『呉子今注今訳』：呉子曰く…兵を用いて戦争を起こす所とは少しでもうっかりすれば命を失う所である。故に（必ず勝利を取ろうという心を以て）必死の決意を抱いて（敵と戦って、敵を脅かす）命が守れる。死に恐れ、命を残したいと気持ちで（方寸を失い、恐怖に支配されて）必ず敵に殺される。

『呉子』の引用が少ないが、この「必死則生必生則死」の理論観念は『万川集海』においてはその影響が深い。すなわち、その死を恐れずに義理の勇を以て、却って生き残る。

〈第六節〉『尉繚子』

『尉繚子』は、尉繚の言説をまとめたと言われる兵法書である。兵法に関する魏(B. C. 453～B. C. 225)の恵王(在位 B. C. 370～B. C. 319)の問いに対し、尉繚が答えるという体裁をとり、書中で尉繚は「臣の術を用うれば」と、王に献策している。著者とされる尉繚の事績は、はっきりしない。現行の『尉繚子』は、「天官」から「兵令下」まで24篇から構成されており、特に後半のほとんどを軍法に費やす純粋な兵法書である。『尉繚子』は著者の履歴も定かではなく、兵法書としての伝来もはっきりとしないため、古来より偽書とされることも多かった。しかし、一九七二年、山東省の銀雀山にある漢代の墳墓から、『尉繚子』の一部が出土しており、漢代にはすでに存在していたことが明らかとなっている^[31]。

『万川集海』では、『尉繚子』の引用は一箇所だけある。

『万川集海』原文：卷十六・遁甲篇・Page8 (『完本「万川集海」』)

「尉繚子曰刑以伐之，德以守之，非所謂天官時日陰陽向背黃帝者人事而已」

現代語訳：P184 (『完本「万川集海」』)

刑を以て之を伐り、徳を以て之を守る。所謂天官(天干すなわち十干)・時日・陰陽・後背ではない。

『尉繚子』原文：(天官)

「梁惠王問尉繚子曰：「黄帝刑徳，可以百勝，有之乎？」尉繚子對曰：「刑以伐之，徳以守之，非所謂天官時日陰陽向背也。黄帝者，人事而已矣。」

比較：

現代語訳には少々問題があると思つている。即ち「向背」の現代語訳である。

『尉繚子今注今訳』：「向」面向之是在前，「背」是背對之在身后，是天時地利人和三者來說。(向、向かいで、前である。背、背きで、後ろである。これは天時地利人和に対しての説明である。)

これにより「向背」とは天時、地利、人和に対しての向かい(良くて吉である)と背き(悪くて凶である)である。『完本「万川集海」』の現代語訳では直接「向背」を「後背」に訳し、理解しにくくなった。全体には意味が通じている。

『尉繚子今注今訳』…梁惠王は尉繚子に問う…黄帝は遁甲、占星などを含める刑徳攻守の方法を以て百戦百勝ができるとは誠だか。答…刑を用いて叛乱を討伐し、福徳を以て国内を守る。これは『天官』にある日時、陰陽、向背などに頼ることではなく、黄帝は黄帝になるとは人力に頼るだけである。

『尉繚子』において、全篇でもこの一つの問題点について説明している、即ち「黄帝は刑徳を以て百戦百勝」である。二十四篇は百戦百勝のために人事をどう配置するのかの説明と言える。故に『尉繚子』は全然遁甲、占いなどを主張しない。

この引用は『万川集海』・遁甲篇のはじめの所にある。著者は『尉繚子』の思想に賛成するが、『李衛公問对』にも影響されたと思われる。遁甲、占星などに依存して戦争を起こすのに反対するが、全然遁甲、占星などを使わなく戦争を起こすことにも反対する。人事は戦争にとっても重要であるが、天時、地利などにはその作用もある。この引用は矛盾しておらず特に問題はない。

〈第七節〉『司馬法』

『司馬法』の「司馬」とは、軍事を司る官職のことである。漢代(B. C. 206～220)の歴史書『史記』によると、戦国時代(B. C. 453～B. C. 221)に斉(B. C. 386～B. C. 221)の威王(在位B. C. 356～B. C. 320)は、司馬に伝わる古くからの兵法をもとに、春秋時代(B. C. 770～B. C. 453)に司馬として斉の景公(在位B. C. 548～B. C. 490)を補佐した田穰苴の兵法を加えて兵法書を編纂させた。これが現在に伝わる『司馬法』だという。漢代の図書目録である『漢書』芸文志では一五五篇あったと記されているが、現存しているのは、「仁本」・「天子之義」・「定爵」・「嚴位」・「用衆」の五篇だけである。田穰苴の兵法が実際に存在したのかどうか分からない。もともと斉は、殷周交替の際、周(B. C. 1046～B. C. 256)の武王(在位B. C. 1046～B. C. 1043)に仕えた呂尚が封じられた国であったが、戦国時代になって、臣下の田氏によって斉の王位は篡奪されていた。威王は田氏の出身であり、先祖にあたる田穰苴をもちあげるため、田穰苴の兵法なるものを創作した可能性が高い^[4]。

『万川集海』では、『司馬法』の引用は一箇所だけある。

『万川集海』原文：卷四・将知一・P535（『完本「万川集海」』）

「司馬法曰我自其外使ハ自其内」

現代語訳：P69（『完本「万川集海」』）

我、其の外より使うは其の内よりと云々。

『司馬法』原文…(定爵)

「凡事，善則長，因古則行，誓作章，人乃強，滅厲祥。滅厲之道…一曰義，被之以信，臨之以強，成基，一天下之形，人莫不說，是謂兼用其人；一曰權，成其溢，奪其好，我自其外，使自其内。」

比較…

忍法の利得十箇条・九忍者は敵陣に潜入して火を放つ。

敵城の内部で火を放ち、混乱させれば、勝ちやすくなる。

『中国歴代兵書集成』…およそ善に従えば長くいける、古代の例を参考すると成功しやすい。公告、誓い言葉は鮮明で人の心を興奮させ、敵を滅ぼす。敵を滅ぼす方法について…一つ、義を以て、即ち誠信で敵を感化し、武力で敵を脅かせ、天下統一の形勢を作り出し、人に愛されて追いついてくる。これは敵国の人が己に使われることである。二つ、謀を以て、敵を驕傲、傲慢させ、敵の要害をとり、外部から衝撃を与えて、敵の内部からの滅ぼしを催促する。

『司馬法今注今訳』…手段を用いる者は敵の外部に立ち、敵の内部での滅ぼしをさせる。

敵の外部で謀略を建て、敵の内部から混乱させると、次第に(敵が)滅亡の道に進むという道理である。忍びに敵城内で放火させ、敵に不安、混乱などを与え、この時に外部からの攻撃と合わせて、勝利する可能性も高くなるわけである。

以上の分析で、この引用には特に問題ないといえる。

〈第八節〉『李衛公問対』

『李衛公問対』は、唐(六一八〜九〇七)の太宗(在位六二七〜六四九)の問いに、將軍李靖が答えるという形式をとった兵法書である。「問対」とは問答のことで、李靖のうちに衛公に封じられたことから、『李衛公問対』という。『唐李問対』、あるいは『唐太宗李衛公問対』などとよばれることもある。『李衛公問対』に書かれているような問答が、実際に太宗と李靖との間で行われたのかどうかは分からない。ただ、太宗の死後まもなく、太宗と臣下との間でかわされた政治論を唐の史官がまとめた『貞観政要』と内容が共通する部分も少なくない^[5]。

『万川集海』において、『李衛公問対』からの引用は全部で五箇所ある。

①『万川集海』原文：卷一・忍術問答・P507（『完本「万川集海」』）

「太公問對二太子靖曰太公言七十一篇也不可以兵窮」

②「太宗問對二李靖曰張良所學太公六韜三略是也韓信所學穰苴孫武是也然トモ大凡不出三門四種而已」

現代語訳：P47・P48（『完本「万川集海」』）

①これは太公の言の七十一編であり、敵状を知るのに兵を使つてはならない云々。

②「張良は太公、六韜、三略を学び、韓信は『司馬法』、『孫子』を学んだ、と李靖が言う」とあり、前漢の張良と韓信の二人が忍術の事を学んだようである。記載内容は三門四種の範囲内であり、忍術はその内の一門である。

『李衛公問對』原文：（卷上）

「太宗曰：漢張良、韓信序次兵法。凡百八十二家、刪取要用、定著三十五家。今失其傳、何也？」

靖曰：張良所學、太公『六韜』『三略』是也。韓信所學、穰苴孫武是也。然大體不出三門四種而已。

太宗曰：何謂「三門」？

靖曰：臣案：『太公謀』八十一篇、所謂陰謀、不可以言窮。『太公言』七十一篇、不可以兵窮。『太公兵』八十五篇、不可以財窮。此「三門」也。

太宗曰：何謂「四種」？

靖曰：漢任宏所論是也。凡兵家流、權謀為一種、形勢為一種、及陰陽技巧二種、此四種也。」

比較：

①と②は同じところに引用されるもので、まとめて説明する。また「注ニ言トハ間事也ト云々」と原本に書かれ、これが恐らく『武経七書匯解』（清・朱庸）からの引用である。（『武経七書匯解』…種以心機生意言儘也言謂間諜中事）

この部分だが、忍者の起源についての回答である。『孫子』の伊摯と呂牙のことを引用して、説明を展開する。（『孫子』引用の②を参照する）またこの部分の現代語訳では意味がかなりずれているので、注意したい。

『中国歴代兵書集成』…

太宗が問う…漢の張良、韓信は当時にある兵法を整理、編纂して百八十家の流派をまとめた。また洗練して三十五家に定着した。今これらの兵法書はほとんど消えたが、なんの故か。

李靖の答え…実は張良が学んだのは大公の『六韜』と『三略』であり、韓信が学んだのは司馬穰苴と孫武の理論道理であります。それらの古代兵書はその類別からいうと、大抵三門四種を超えることはありません。

太宗が問う…三門というのは何か。

李靖の答え…『太公謀』八十一篇は第一門、詭計の謀は言葉では（その深意が）よく説明できません。『太公言』七十一篇は第二門、奥深い道理は兵を以ていても（その妙用が）うまく發揮できません。『太公兵』八十五篇は第三門、兵を用いる道理は人の才能では（その極義に）たどり着けません。これが古代兵書の「三門」であります。

太宗が問う…四種というのは何か。

これは漢の任宏による兵学の分類する方法であります。全ての兵家流派はこの四種類に分けられます。即ち「権謀」、「形勢」、「陰陽」、「技巧」であります。

著者は忍びの起源を回答している。一番古い兵法書である『孫子』から、『李衛公問对』まで、忍者の真实性、またその過程を説明している。だが問題点がある。

「注ニ言トハ間事也ト云々」について、まずはこの註はおそらく『武経七書匯解』からの註である。すなわち、「言謂間諜中事」（言とは間諜のことである）である。

だが、この「言」は「『太公言』七十一篇」の「言」を指し、他の兵法書にはこのよ
うな（言謂間諜中事）解釈がない。恐らく『武経七書匯解』だけにある。なお、『太公言』七十一篇は現在中国では『太公金匱』を指しているが、『太公金匱』には「間」についての論じはない。故に、なぜ『武経七書匯解』では「言」を「間諜」に意味したの
だろう。この点について、謎である。

これにより、三門の一門である言は（間）忍術であることに疑問を持っている。

③『万川集海』原文…卷四・将知一・P336（『完本「万川集海」』）

「太宗問对ニ李靖曰按ニ孫子用間最下為下策臣嘗テ著論ヲ於其末云水能載舟亦能覆舟或用間以成功或憑間而傾敗」

現代語訳：P71（『完本「万川集海」』）

李靖は、よく考えてみると、孫子の用間は最も下策かも知れない。著の末尾に、「水は船を浮かべるが、沈めもする。同様に間者は功もたてるが、頼みにした味方を滅ぼす」云々。

『李衛公問对』原文…（巻中）

「靖再拜曰…「臣與儉比肩事主，料儉說必不能柔服，故臣因縱兵擊之，所以去大惡不顧小義也。人謂以儉為死間，非臣之心。按《孫子》，用間最為下策。臣嘗著論其末云…水能

載舟，亦能覆舟。或用間以成功，或憑間而傾敗。若東髮事君，當朝正色，忠以盡節，信以竭誠，雖有善間，安可用乎？唐儉小義，陛下何疑？」

太宗曰…「誠哉！非仁義不能使間，此豈織人所為乎？周公大義滅親，況一使人乎？灼無疑矣！」

比較…

ここは、忍者を使うとかえって味方に害をもたらすという疑問について、著者は李靖の話を用いて説明した。

『唐太宗李衛公問對今註今譯』…

李靖…「わたしは儉と一緒に陛下に努め、唐儉の弁舌では突厥を説き伏せることはできないと判断したから、機を狙い攻撃をしました。つまり大きな災いを除くために小さな義を捨てたのです。儉を死間に使うと多く言われましたが、それは私の本意ではないです。「孫子」の言う通り、用間は最下策であり、この用間編を読み、その末に『水は舟を浮かべるものであるが、同時に舟を転覆させることもする。』と註をしました。ある人は間を以て成功になりますが、ある人は間により惨敗になってしまいました。人は大人になって朝廷に入り、忠誠を尽くして責任を持ち、欲望など全然無くして主君のために行動すれば、たとえ相手が上手く間諜を使って、我らを離間しても、何も変わりません。唐儉のような小さい事、陛下は何で懸念を抱くのでしょうか。」

太宗…「誠にその通りだ。仁義でなければ間が使えない、卑劣者はどうしても間が使えない。かつて周公且は大義のためにあえて兄に手をかけたという。まして一使節など言わずもがなである。そなたの真意はよくわかった。もはや一点の疑念もない。」

李靖の話によると、問題は自分の内部ではどうする事である。相手はどんなに上手く間諜を使って味方に来ても、内部は団体一心であれば、無事で済む。また、何で「用間は最下策である」について、水と舟の関係のように安定していないと説明している。

だが、『万川集海』では、著者は後の答の所にうまく説明した。即ち「愚将ノ為ニハ下策也、明将ノ為ニハ上策也」である。

興味深いのは『李衛公問對』における太宗の最後の一言である。「仁義でなければ間が使えない、卑劣者はどうしても間が使えない」。これが『萬川集海』の説明と共通している。

④『万川集海』原文…卷十・陽忍下・Page（『完本「万川集海」』）

「李靖曰旗齊鼓應メ號令如一紛々雖退走非敗必有奇」

「李靖曰兵卻旗參差不齊鼓大小不應令喧囂而不一是真之敗卻也非奇」

現代語訳：Page（『完本「万川集海」』）

旗を調べ、鼓に応じて号令一つで散り散りに逃げるのは敗北による逃走ではなく、必ず奇計がある。

兵が本気で退却するなら、旗が入り混じって整然としてはいない。兵は鼓の大小の音に呼応せず、命令が騒々しく飛び交って一つにならない。これは真の敗退であって奇計ではない。

『李衛公問对』原文…(巻上)

「太宗曰…「凡兵皆謂之奇乎？」

靖曰…「不然。夫兵卻，旗參差而不齊，鼓大小而不應，令喧囂而不一，此真敗卻也，非奇也。若旗齊鼓應，號令如一，紛紛紜紜，雖退走，非敗也，必有奇也。法曰…「佯北勿追」，又曰…『能而示之不能』。皆奇之謂也。」

比較…

これが「敵が伏兵を置いて騙して逃げるのを察知する事」の所に引用された内容である。李靖の話を参考にして、真の敗退なのか、奇計なのかを判断する。特に問題がない。

⑤『万川集海』原文…巻十六・遁甲篇・P669・P670 (『完本「万川集海」』)

「唐太宗曰日時方ノ類ハ一切用ルニ不足モノ也捨之ハ如何…鬼神ニ問フ也…大公ハ必定勝ンか爲ナリ…皆理之如此。」

現代語訳：P184・P185・P186 (『完本「万川集海」』)

昔、唐の太宗が、「日・時・方の類は一切用いるに足りないものである。これを捨てては如何だろうか」と問うと、李靖は「これを廢してはなりません。何故ならこれらは兵法では策略の道であり、日取り・時取り・方取りを使つて臆病者や愚痴な者を動かす事が出来るのです。彼らは吉日・吉方に迷っており、『今かかれば、大敵強敵もたちまち破る事が難無く出来る』などと言ひ聞かせ、勇気を奮い立たせる方便です。よつてこれを捨てるわけにはゆきません」と答えている。太宗はまた「卿、あなたは常に『天官・日時を明將は用いない。暗將はこれに拘わり泥む』と何時も言われる。ならばこれを捨てるべきではないのか」と問うと、李靖は「昔、殷の紂王は甲子の日に戦つて武王の為に討たれ亡ぼされました。また周の武王も甲子に出戦して大勝利を得て天下を治められました。出陣の日は各甲子の日です。また宋の武帝劉裕は往亡の日に軍を起して南燕を攻めました。その時に諸將は『往亡は凶振です。軍兵を出してはなりません』と言つと、武帝は『往亡は吉日である。吾が往くので敵が亡ぶ日になるのだ』と言つて終に軍を出して大勝利を得、燕を亡ぼしました。このように思えば、日取りや時取りなどはわざわざ廢さなくてもよいのは明らかです。田単「宋の武帝」は小勢で即墨とい

う所の城を守っていたが、燕の大軍が来攻して城を包囲しました。墨軍の勇氣は失せてしまい、燕軍に投降すべきか逃げるべきか、と慌てふためいたので、田単は工夫を廻らして一人に契約を固めて神の使いとし、謹んでその鬼神を祭るふりをしました。予めの約束事通りに、神の使いが口を開き、『時を移さずに攻撃すれば燕軍は必ず敗れる』と告げたので諸軍は尽く勇み立って進軍を始めました。田単はその勢いに乗じて、火牛の術〔牛の角に刃を結び付け、尾に葦の束を結んで油を撒いて火を付けて敵陣に向かって暴走させる術〕で燕軍を追い破り大勝利を得る事が出来ました。これこそ兵法は詭詐の道なりの好例です。天官時日などを捨てずに利用すれば、この様な結果が得られるのです」と答えた。太宗はまた、「田単は神怪を謀って燕軍を破り、太公は亀著〔亀の甲羅を焚いて亀裂で吉凶を占う〕を焚いて殷の紂王を亡ぼした。田単が神託に頼ったのと、太公が亀着を焼いて占ったのとの違いは何処にあるか」と問うと、李靖は「明將の機転は皆一つです。あるいは逆手に取り、順手で行うが、その実は皆同じ意味です。昔、太公が武王を助けて出陣し、牧野という所に行った時、急に雷雨振動して旌旗も折れ、金鼓も壊れて気色が恐ろしき事この上有りませんでした。この時に散宜生〔周の文王と武王に仕えた名臣〕は『まず軍勢を引き返し、重ねて良辰を占い、軍を出すべきです』と言いました。散宜生がこの様に言った意味は、出陣の折柄に斯様な不吉の相があるのは軍中が疑い恐れた事でしょう。それでは戦は不吉となります。よって諸軍の惑いを解く為に亀甲や筮竹で卜筮し、鬼神に問うのも方法です」と答えた。太公は「腐りたる算木〔占用の約十センチの正方柱体の六本の本〕や死んだ亀の甲で何故軍の吉凶が判断出来るのか。武王は下臣であり、紂王は君主である。だから家臣が主君を討つ事になり、家臣が主君に勝利するのは理に反する。よって占えば不吉の卦が出て、占に従って軍を引き上げて再出陣するとして、終に占わないで進軍しました。この二つは悪例とは言えません。散宜生は卜筮で吉日であるとして、前もって軍中に知らしめて惑いを解く為でした。太公は必ず勝つ為のものでした。この二人の話は極まる所、その理は同じです。皆、各士卒の惑いを解く為でした。よって日取り・時取り・方取りの事は皆事同じ理です」と答えた。

『李衛公問對』原文…（卷下）

太宗曰…「陰陽術數，廢之可乎？」

靖曰…「不可。兵者，詭道也。託之以陰陽術數，則使貪使愚，茲不可廢也。」

太宗曰…「卿嘗言天官時日，明將不法，暗者將拘之，廢亦宜然。」

靖曰…「紂以甲子日亡，武王以甲子日興。天官時日，甲子一也。殷亂周治，興亡異焉。

又宋武帝以往亡日起兵，軍吏以為不可，帝曰…『我往彼亡。』果克之。以此言之，可廢明

矣。然而田單為燕所圍，單命一人為神，拜而祠之，神言：『燕可破。』單于是以火牛出擊燕，大破之。此是兵家詭道，天官時日亦猶此也。」

太宗曰：「田單託神怪而破燕，太公焚著龜而滅紂，二事相反，何也？」

靖曰：「其機一也，或逆而取之，或順而行之是也。昔太公佐武王，至牧野遇雷雨，旗鼓毀折，散宜生欲卜吉而後行，此則因軍中疑懼，必假卜以問神焉。太公以為腐草枯骨無足問，且以臣伐君，豈可再乎？然觀散宜生發機于前，太公成機于後，逆順雖異，其理致則同。臣前所謂術數不可廢者，蓋存其機于未萌也，及其功，在人事而已。」

比較：

「尉繚子」の引用の所を参照する。

軍事において、日取り、占いなどがあるべきかについての説明であるが、殆ど『李衛公問對』の内容を引用した。主旨だが、軍事において、人事が一番重要でありながら、遁甲（或いは日取り、占い）は精神面に影響を与えるため、簡単に捨てはならない。占いを利用して、士卒を興奮させることがあれば、占いなどを信じ、勢い戦って勝利をもらうこともある。

長い引用であるが、特に問題がない。

現代語訳では、中国方面の説明と外れた内容があるので、例を挙げる。

一：

『李衛公問對』原文…可廢明矣

『万川集海』原文…日取時取ハ可廢一ニ非ル一明ケシ

『中国歴代兵書集成』…廢棄すべきであることが明らかになった。

『万川集海』現代語訳…わざわざ廃さなくてもよいのは明らかです。

二：

『李衛公問對』原文…太公焚著龜而滅紂

『万川集海』原文…太公著龜著ヲ焼タル

『中国歴代兵書集成』…大公が占う龜甲を焼き尽くして（占わない）紂を滅ぼす。

『万川集海』現代語訳…大公が龜甲を焼いて占った。

この二つであるが、二は全く違う意味であるので、注意したい。

まとめ

『李衛公問對』からの引用五カ条で、特に矛盾しているところはない。

①と②では、「三門四種」を始めとして、「三門」の一門である「言」とは間諜であると著者は述べたい。この部分では『武経七書匯解』の姿が見られる。

③は「間」を使うには、使う手は明智でなければならぬ。「間」は両方の情報を持っているので、まさに水と船の関係で、慎重に対応しなければならぬ。

④は真実の敗北の認識方法として、参考になれる。特に矛盾はない。

⑤は『万川集海』では長く抄出している。遁甲、占いなどは本当に戦争に役立つのかについて、詳しく答えている。即ち、占うにより、士気を興奮させることができ、よりよく戦える。戦争では、人力が一番重要であると著者は賛成するが、遁甲、占いなどにも作用があり簡単に無視してはならない。

なお、「注ニ言トハ間事也ト云々」について、恐らく『武経七書匯解』にしか書かれていない。『武経七書匯解』については、その部分で分析するので、ここでは省略する。

《第二章》他の兵法書の引用

本章から武経七書以外の兵法書からの引用について、調べて詳しく比較するが、現在まで明らかになったのはこの七書である。即ち『兵鏡』・『七書直解』・『太白陰経』・『十一家注孫子』・『孫子書校解引類』・『喻子十三種秘書兵衛』・『武経七書匯解』である。だが、他の兵法書だといっても、七書に關係する本も四つある。故に七書の以外は『兵鏡』・『太白陰経』・『喻子十三種秘書兵衛』で、この三つである。これらの兵法書の詳細はその節で説明する。

《第一節》『兵鏡』

『兵鏡』は古代中国明の万曆四十八年（元和六年、一六二〇）前後、呉惟順、呉鳴球、呉若礼により編纂された。内容は、軍制、選將、任將、將職、講武、行軍、計戦、營陣、攻守、軍需、天文、地理に及ぶ^[12]。

本論文では、『中国兵書集成』にある『兵鏡』の本文を参照にしている。『兵鏡』からの引用は全部で四つある。

①『万川集海』原文：卷四・将知一・P533（『完本「万川集海」』）

「兵鏡曰凡欲征伐先用間謀覘敵之衆寡虛實動靜然後二與師大功可立。戰無不勝。」

現代語訳：P58（『完本「万川集海」』）

征伐したくば、まず間謀を使って敵の勢力、虚実、動静などを窺い報告させ、その後に軍隊を動かせば戦勝間違いない。

『兵鏡』原文：（卷十・百戦條略・間戦）

「凡欲征伐先用間謀覘敵之衆寡虛實動靜然後與師大功可立。戰無不勝。法日無所不用間也。」

比較：

これは忍法の利得の十か条の二…忍者を送り込んで、敵の強弱、特に敵の大将の心底を探らせて我々の主將に知らしめることは万策の基本であり、結果として利得も甚大とあるというところの引用である。（『孫子』引用の⑧と同じのところである）

『兵鏡』現代語訳：凡そ敵を討伐する前に、先ず間謀を用いて敵の衆寡、虚実、動静を観察してから攻める。これは百戦百勝である。兵法に曰く…何のことに間謀を用いる。

この現代語訳はほぼ『万川集海』の現代語訳と同じものであり、特に問題がない。

②『万川集海』原文：卷七・将知四・P547（『完本「万川集海」』）

「兵鏡曰間者兵家之妙要」

現代語訳：P83（『完本「万川集海」』）

間者は兵家の妙法。

『兵鏡』原文：（卷十・間諜）

「是以知間者兵家之要妙也。」

比較：

これは間諜の重要性が説かれている。『万川集海』では、愚将は間諜を使い、害をもたらすことに反して、賢将は間諜を使い、簡単に敵を滅ぼす。間は極めて重要であるが、將軍によることも重要である。特に問題なし。ちなみに、『兵鏡』では、この部分はかなり『孫子』の「用間」の内容を引用した。まさに「用間」の説明であろう。

③『万川集海』原文：卷十七・天文篇・P677（『完本「万川集海」』）

「風雨賦」（全篇）

『兵鏡』原文：（卷十八・占候）

「風雨賦」（全篇）

比較：

著者は抄出と書き、完全引用である。風雨を予測する知識として、忍びに参考になると思われる。単純な引用で、省略する。

④『万川集海』原文：卷十七・天文篇・P681（『完本「万川集海」』）

「若遇天景暄霾夜色暝黑又不能辨方向則當縱老馬前行令識道路或用指南針及指南魚以辨所向魚法用薄鐵葉剪裁長二寸濶五分首尾銳如魚形置灰火燒之候通赤以鉄鈴リ莫首出火以尾正對子位蘸水盆中沒尾數分則上以密器收之用時置水椀於無風處平放魚在水面令浮其頭當南向午也指南針即羅盤內所用者。」

『兵鏡』原文：（卷七・行軍定惑）

「若遇天景暄霾。夜色暝黑。又不能辨方向。則當縱老馬前行。令識道路。或用指南針及指南魚以辨所向。魚法用薄鐵葉剪裁長二寸。濶五分。首尾銳如魚形。置灰火燒之。候通赤以鉄鈴鈴魚首出火。以尾正對于位蘸水盆中。沒尾數分。則上以密器收之。用時置水椀於無風處平放魚在水面令浮。其首當南向午也。指南針。即羅盤內所用者。」

比較：

これも完全引用であり、方向をしるやり方について、紹介する。

まとめ：

『兵鏡』からの引用は特に問題がない。天文篇において、長く抄出することがあるが、本当に理解できるかという疑問を持っている。

〈第二節〉『七書直解』

『七書直解』は明太祖朱元璋の命により、劉寅が編纂して明洪武三十一年（応永五年、一三九八）に成書した。巻首には序言・誦兵書法・凡例・引用・武経所載陣図・武経所載国名・目次・兵法附録がある。全書は二十五卷一百一十四篇からなっている
[17]。

『万川集海』においては、『七書直解』からの引用は一箇所だけある。

『万川集海』原文：卷一・忍術問答・P55（『完本「万川集海」』）

「用間ノ篇ノ字ノ註ニ間ハ罅隙也人ノ来敵罅隙入以テ探リ知ル其情也」

現代語訳：P45（『完本「万川集海」』）

『孫子』の用間篇に「間は罅隙の意味であり、人をして来敵の隙を突いて潜入させ、その状況を探らせて敵を知る」とある。

『七書直解』原文：（用間）

「罅隙也令人乘敵罅隙而入以探知其情也」

比較：

『七書直解』からの引用は一か所だけである。「間」についての説明で、忍びに説明するのに相応しい。引用は矛盾していないが、ただ『万川集海』の現代語訳の所に

(P45) 「『孫子』の用間篇」と訳されていて、実は「『七書直解』」と確定できる。

〈第三節〉『太白陰経』

『太白陰経』は、唐代（六一八〜九〇七）の凶書目録である『新唐書』芸文志に「太白陰経十卷」として記載されており、著者は、唐の官吏であった李筌という。李筌の経歴については、不明な点も多く、どのような経緯で『太白陰経』が編纂されたのかについては判然としない。ただ、李筌は『孫子』の注釈書なども残しているので、兵法に詳しくかつたのは確かである。

李筌は『太白陰経』において、前代までの主だった兵書を解説し、そこに自説を補っている。また、「諸葛亮の八陣」などを図示して紹介しているが、これは李筌の想像にすぎない。

書名にみえる「太白」とは、軍事の兆しとされる金星のことである。この書名に違わず、『太白陰経』では天体観測をはじめとする占術などを取り上げ、兵法を論じている。『太白陰経』は「人望」・「戦具」・「預備」・「陣図」・「祭文」・「捷書」・「薬方」・「雑占」・「遁甲」などの巻から構成されているが、神々に戦勝を祈る「祭文」巻、戦勝を報告する「捷書」巻といった巻名からも、神秘的な要素がうかがえる。

『太白陰経』には「惑わずに巫覡ふげきをもつてし、それをして鬼神を尊ぶ」（術有陰謀篇）とあり、「巫覡」つまり祈橋師に鬼神を崇拝させるように説く。ただ、呪術や占術に依拠する「陰陽」の兵法とは異なり、『太白陰経』は呪術・占術だけで勝つことができるとは考えていない。

また、『太白陰経』は、「謀は心に蔵し、事は後にあらわす」（沈謀篇）というように、謀略を心の中に秘し、表面的には異なるようにみせなければならぬという。これが『太白陰経』にとつての「詭道」であった。『太白陰経』は、「詭道」の一環として、占術などを積極的に活用しようとしたのである。この考え方は、『李衛公問对』に近い^[8]。

『太白陰経』の引用は一ヶ所しかない。それは「行人」という呼称に関する引用である。

①『万川集海』原文…卷一・忍術問答・P505（『完本「万川集海」』）

「行人」

『太白陰経』原文…（卷二人謀下・行人篇）

「夫行人之用事有二…一曰…因敵国之人来觀釁於我，我高其爵，重其祿，察其辭，覆其事；実則任之，虚則誅之；任之以郷導。二曰…吾使行人觀敵国之君臣；左右執事，孰賢孰愚？中外近人，孰貪孰廉？舍人謁者，孰君子孰小人？吾得其情，因而隨之，可就吾事。」
比較…

これは忍びの呼称について、古代中国には「間」「謀」「細作」「游偵」「姦細」「行人」などがあるが、「行人」が『太白陰経』にあることを確認した。

②『万川集海』原文…卷一・忍術問答・P510（『完本「万川集海」』）

「若擊隼之入重林無其蹤若游魚之入深潭無其跡也離婁俛首不見其形師曠傾耳不聽其聲微乎々々與織塵俱飛豈勇力輕命之將而見行人事哉」

現代語訳：P51（『完本「万川集海」』）

もし隼が深い森の中へ飛撃して入り込めば跡形も無くその姿を見失い、游魚が深い淵に潜った場合も同じである。それは、離婁のように眼の良い人でも見えず、師曠ほど耳が良い人でも音を聞き取ることは出来ない。微塵は力を加えなくても飛び、眼には見えない。

重複して引用されている、卷十一・陰忍一・P620にも同じものがある

『太白影経』原文…（卷二・人謀下・行人篇）

「若鷹隼之入重林，無其蹤；若游魚之赴深潭，無其跡。離婁俛首，不見其形；師曠傾耳，不聆其聲。微乎！微乎！與纖塵俱飛，豈飽食醉酒爭力輕合之將，而得見行人之事哉！」

比較…

敵の警備は厳しい場合、どうやって忍び込むことについて、その回答の末に引用された。『万川集海』の現代語訳はほぼ問題ないが、最後の部分が訳されていない。すなわち「微乎々リ與纖塵俱飛豈勇力輕命之將而見行人事哉」である。訳すれば、「（行人を用いることは）微妙であり、微塵とともに飛ぶ。食、酒（の欲望）に沈んで、能力もない愚将には行人のことがわからない。」という意味である。著者はまず始計を以て、常に謀略をすることと回答し、また「無所不用間」と用間篇をも引用して、「間」を用いることが重要であり、將軍自身にも才能あるかどうかも重要であると説かれている。

まとめ：

『太白陰経』からの直接的な引用は一つある。「間」について、その微妙さや神秘的なところが説かれている。特に問題がない。

〈第四節〉『十一家注孫子』

『十一家注孫子』は南宋時代に編纂されたと推測するが、具体的な時期がわからない。また版本も繁多で、考拠にも難しく、今も不明ところがある。また、十家、十一家との異論もある。十一家とは曹操、梁孟氏、李筌、賈林、杜佑、杜牧、陳皞、梅堯臣、王皙、何氏、張預である^[9]。

『万川集海』では、『十一家注孫子』からの引用は二か条である。

①『万川集海』原文：卷二・正心・P513（『完本「万川集海」』）

「鄭友賢曰古人立大事就大業未嘗不守於正正不獲意未嘗不假權以濟道夫事至於用權則何所不為哉但處之有道而卒歸于正則權而無害則聖人之德也在兵家名曰間在聖人謂之權湯不得伊不能悉夏王之惡伊不在夏不能就湯之美武不得呂不能成武王之德呂牙不在商不能就武之德非此二人者不能立順天應人吊民伐罪之則非為間於夏商而何惟其處之有道而終歸于正耳」

現代語訳：P53（『完本「万川集海」』）

昔から大事を志して大業を成就した人の共通点は正心を貫いたという事である。正心には強固な意志の継続が必要であり、一時的な権だけでは王道を開くことは出来ないし、また権謀を画策するだけでは何事も成功しない。成功するには正道の外はない。権謀しても害が無い場合は、聖人の徳のなせる技である。これを兵法家は間と言ひ、聖人なら権と言ふ。殷の湯王に賢臣の伊が居なかつたら、夏王の悪事を審らかにすることは出来なかつた。また伊が夏国に潜入して情報を入手していなければ、湯王の美談も生まれることは無かつただろう。武王に呂「太公望」が居なければ、武王も徳政を敷く事は出来なかつたはずである。この二人が居たからこそ、君主は天命に従ひ、人心に対応し、領民をあわれみ、罪を伐ることが出来た。すなわち間者を夏や商の国に送り込まなければ、どうして覇道が開け、正道に帰することが出来ただろうか。

『十一家注孫子』原文：（孫子遺説）

「古之人立大事就大業未嘗不守於正正不獲意則未嘗不假權以濟道夫事業至於用權則何所不為哉但處之有道而卒反于正則權無害於聖人之徳也蓋盡在兵家名曰間在聖人謂之權湯不得伊摯不能悉夏政之惡伊摯不在夏不能成湯之美武不得呂牙不能審商王之罪呂牙不在商不能就武之徳非此二人者不能立順天應人伐罪弔民之仁義則非為間於夏商而何惟其處之有道而終歸于正」

比較：

「孫子遺説」において、これは「間」というのは不正であり、邪であるが、なぜ間を重視するかという質問に対しての回答である。

つまり、聖人が正を持って、「権」を用いるのは（兵家の）「間」と同じもので、本質は同じく名称だけが違っている。故に「間」を用いるには「正」は極めて重要である。これがいわゆる忍者の正心である。

②『万川集海』原文：卷五・将知二・P538（『完本「万川集海」』）

「出入口耳将与間聞知其事而已」

現代語訳：P73（『完本「万川集海」』）

将と間者とのやりとりは文書に残さず、直接に口頭で行う。

『十一家注孫子』原文：（用間）

「事莫密於間杜牧曰：出入口耳也密一作審張預曰：惟將與間得聞其事非密與」

比較：

『孫子』の引用の⑮を参照する。（P10）

これは二つの文を合わせ、ある物を削除して一つの文にした引用で、『十一家注孫子』の出自である。

『孫子』の原文の「事莫密於間」についての注解で、『孫子』の引用の⑮に詳しく説明しているため、ここでは省略する。特に問題がない。

現代語訳について、「口で話したら他人の耳に入る。将と間だけが事を知る。」のほうがよいだろう。

まとめ：

鄭友賢により書かれた「孫子遺説」は実は『十一家注孫子』の内容ではない、ただし、『十一家注孫子』の補充として、常に一緒にされている。なお引用について、現代語訳には少々問題点があるが、全体的には矛盾することはない。

〈第五節〉『孫子書校解引類』

『孫子書校解引類』は『孫子書』とも読む、明の張本学（生卒不明が、吳如嵩『孫子兵学大辞典』により、生卒は一四七八～一五四四）により著作された。明隆慶二年（永禄一年、一五六八）に成書になった。『孫子』の研究においてはとても重要な著作である[20]。

『万川集海』原文…卷八・陽忍上・P569（『完本「万川集海」』）

「直解ニ云五間之事固皆人主所知然郷内死生ノ四間皆因反間而用故反間比於四者尤所當知尤所當厚者也大抵遣間以間之不若因人之間以爲間何則上智之人ハ常少不才之人常多慷慨之事常難苟免之事常易間者至敵有良金美女在其前後有刀鋸鼎鑊在其左右畏死貪財二心交并則將吐盡隱諱以告人者有之縱有過人口才不至降伏受敵人巧詞鈎致言語既多不無隙露形跡是則以之間人而反以之報之也用間所以爲難惟在於此孫子深知其患故示人反間之爲重也、」
現代語訳：P102（『完本「万川集海」』）

一般人も主君も五間を知るべきである。そうすれば郷間・内間・死間・生間の四間は反間を使うのが一番よいという事がわかるだろう。この利こそ反間を他の間者より高い知行で厚遇する理由である。反間ほど、敵の内情を知る間者はいない。賢者は少なく愚者は多い。また憤慨は得には成らないので許す方が容易い。敵内では間者の眼の前に金や美女が、そして後方左右に刑罰用の刀鋸と湯で釜が置かれており、死を恐れ、財を貪る。この二心が交錯した挙句、敵將に秘密を尽く暴露し、重要人物を密告する者がいるものだ。たとえ弁舌巧みにして降伏しなかったとしても、敵の巧みな言葉に引っかけられると、すでに自分は話し過ぎているのが常であり、隙が生じている。よって謀略やその痕跡が露頭してしまう。従ってこの者を間者に仕上げて反忠させ、それに報いてやるのである。用間の難しさはこの一点である。孫子は深くその弱点を見抜いていた。よって反間の重要性を説いているわけである。

『孫子書校解引類』原文…（用間）

「結上文之意言五間之事固皆人主所當知，然郷内死生四間皆因反間而用故，反間比於四者尤所當知尤所當厚者也，大抵遣間以間人不若因人之間以爲間，何則上智之人常少，不才之人常多。慷慨之事常難，苟免之事常易。間者至敵有良金美女在其前後有刀鋸鼎鑊在其左右，畏死貪財二心交并則將吐盡隱諱以告人者有之縱有過人口才不至降伏日受敵人巧詞鈎致言語既多不無隙露形跡是則以之間人而反以至報人也用間所以爲難惟在於此孫子深知其患故示人反間之爲重也、」

比較…

現代語訳にすると・・

前文の意と合わせ、五間のことについて、主君は知るべきである。しかし、郷間・内間・死間・生間の四間は皆反間により動くため、反間は他の間より最も知るべし、最も厚遇するなり。大抵として、間を遣わせて敵を探索するのは敵から来る間を以て（反間にする）敵を知るほうがよい。だが賢者は少なく愚者は多い。慷慨するのは難しく苟且するのは易しい。間者が敵に行き、敵地では間者の眼の前に金や美女を出し、そして後方左右に刑罰用の刀鋸などが置かれており、死を恐れ、財を貪るといふ二心が交錯して敵將に秘密を尽く暴露し、重要人物を密告する者がいるものだ。たとえ弁舌巧みにして降伏しなかったとしても、敵の巧みな言葉に引っかけられると、すでに自分は話し過ぎで、隙が生じて情報が漏れてしまった。それでこの者を間者としているが、逆に味方の情報を敵に報告した。用間の難しさはこの一点である。孫子は深くその弱点を見抜いていた。よって反間の重要性を説いているわけである。

『孫子』引用の②を参照する。引用された内容は『孫子』の「五間之事、主必知之、知之必在于反間、故反間不可不厚也。」の注解である。「反間」が最も重要であると提唱している。

天睡術とは敵忍を利用して、敵を滅ぼすことで、「反間」にあたる。

『万川集海』の現代語訳には、訳されていないところがあれば、意味がずれているところもある。だが、全体的には意味が特に変わっていない。

〈第六節〉『諭子十三種秘書兵衡』

『諭子十三種秘書兵衡』は明の諭龍徳により編纂された。一三巻からなっている。陰陽玄学、奇門遁甲などを主としての兵法書で、乾隆帝時代では読むことを禁止することもあった^[2]。単純な引用で「占風雨十六條」に集中されている。

『万川集海』原文：卷十七・天文篇・Page（『完本「万川集海」』）

「占風雨十六條

一日之暈雨月之暈風有闕之方為風雨

……（省略）

假如正月雨水第一日夜半在室八度至第二日夜半行一十三度少強即至壁五度第二夜半至奎

九矣（秘訣）」

『諭子十三種秘書兵衡』原文：（卷七）

「風雨占」

日暈雨月暈風有闕之方為風雨

日沒胭脂紅無雨也有風

星光閃有風

風早起晚和明日防大風

春風易報一日南風必還一日北方雖有早風向晚必靜

防南風尾北風頭南風漸吹漸急北風吹起便大

雲若砲車形起主大風

雲起下散四野滿目如烟如霧名曰風花主風起

云若魚鱗不雨必風

水際生靛青主有風雨

秋天雲陰若無風則無雨

海燕忽成羣而來住風雨鳥肚雨曰肚風

海豬亂起主大風

水蛇蟠在蘆青高處主水高小若干漲若干回首望下水即至望上稍慢。

月盡無雨來月初必有大風雨。武備志

月在箕壁翼軫此四宿者乃風起之日也月每一日一夜行十三度有令二十八日一周天晦朔

一日不見其行度但查中氣日月合宿為首推之亦不必拘泥四七正度但依李筮大約度數此喻子舊本

自注

日月合宿者雨水在室八度春分奎十四度穀雨昴二度小滿參四度夏至井二十五度大暑星

四度處暑翌九度秋分角四度霜降氏十四度小雪箕二度冬至斗廿一度大寒虛五度。

大約度數者東七宿七十五度角十二亢九氏十五房五心五尾十八箕十一北七宿九十八度斗廿

六牛八女十二虛十危十七室十六壁九西七宿八十度奎十六婁十二胃十四昴十一畢十六觜二參

九南七宿百十二度井三十三鬼四柳十五星七張十八翌十八軫十七。

假如正月雨水第一日夜半在室八度至第二日夜半行一十三度少強即至壁五度第三夜半至奎

九矣秘訣

比較

注意点…占風雨十六條において、『喻子十三種秘書兵衡』からの引用を主としているが、他には『武備志』からの引用は二カ条、『唐開元占經』からの引用は二カ条、『武備經總要』からの引用は二カ条、不明な引用は三カ条ある。

（『武備志』の「武備」とは、平時にあっても防備を忘れないという意味である。明代（1368～1644）末期の著名な学者茅坤の孫にあたる茅元儀によって編集された。『武備志』は、江戸時代の日本にも伝わって、和刻本が刊行された^[23]。

日本大百科全書による…

『唐開元占經』…中国唐代の天文、占星術などに関する書。718～726年（開元6～14）に中国在住のインド人天文学者瞿曇悉達（くどんしつた）らが撰じた。全120巻。正式には『大唐開元占經』という。いったん失われたが、明（みん）代に古仏の腹中から発見され、今日まで内容が伝えられた。

『武経総要』…中国、宋（そう）代の軍事技術書。北宋の曾公亮（そうこうりょう）、丁度（ていたく）らの撰（せん）により、1044年に完成。全5巻からなる。当時、西夏（せいしか）の侵入などもあって、仁宗（じんそう）が曾公亮らに命じて兵法、作戦、軍事技術などの知識をまとめさせた。前・後の2集に分かれ、前集は制度15巻・边防5巻、後集は故事15巻・占候5巻となっている。兵器類や陣立てなどの図が多く掲載され、火薬の製法や使用法、火炎放射器の類などの記事がある。）

『武備志』…軍資乘・火三・用火器法・風候（原文）

「仰觀星宿。光搖曳不定。亦不出三日。必有大風。日終而止。黑雲夜蔽斗口。風雨交作。雲自北方起者風大。黑雲飛塞天河。大風數日雲如豬形者名曰天豕渡河」

『唐開元占經』…（原文）

「荊州占」曰…「四五月之七日，四仲月之八日，四季月之九日，皆當月暈。暈不以其日，不出三日有暴風甚雨。」

「帝覽嬉」曰…「月蝕東方，其月中有惡風；月蝕西方，主人為客。」

『武経総要』…卷十六占候六（原文）

「气如黑蛇貫日，有雨水。气如人頭旗，皆为有兵流血。日出入有黑云貫之，不出三日有暴雨。」

不明な引用…

「○日上丁有黑氣如地龍者主風雨○日出如車蓋必雨○日無光昼昏到暮不解有大水」

これにより、この十六條はすべて中国古典から抄出したものと推測する。風雨の予測方法の参考として、問題がないだろうが、原文においては、中国のほうより字が漏れたこと、間違つて書くことがあるため、理解しにくくなる。

『唐開元占經』…

「荊州占」曰…「四五月之七日，四仲月之八日，四季月之九日，皆當月暈。暈不以其日，不出三日有暴風甚雨。」

『万川集海』…

孟月十一日，仲月八日，季月九日，皆當月有。月暈若不暈不出三日主風雨。

「七日」は（縦書きのせい）間違つて「十一日」を書いた。「月暈」を「月有」と書いたなど。

本論文ではこれを単純な引用としたい。

〈第七節〉『武經七書匯解』

『武經七書匯解』は清の朱墉により編纂されたが、具体的な成書時間は確定できない。ただし、最初は一六八八年に『武經匯纂』八巻の発行があり、それから、一六八九年、一七〇〇年に『武經七書講義全匯合参』、『（増補）武經七書匯解』、『武經七書匯解』などが発行されていた。書名は違っているが、その内容はほぼ同じである^[31]。著者である朱墉は一六二八年に生まれ、一七〇五年に死去した^[32]。『万川集海』において、『武經七書匯解』からの引用は三カ条ある。

『万川集海』原文：卷一・忍術問答・P507（『完本「万川集海」』）

①（破損）有天下之號伊摯即伊尹也夏謂夏王桀也昔殷之初興也人皆知暴王於南巢放而已然レトモ不知伊尹五ツタヒ就キ于桀ニ五タヒ就于湯ニ伊之為間也、」

現代語訳：P47（『完本「万川集海」』）

殷の時代〔前一六〇〇〜前一〇〇〇〕だが文面の時代はその後期の事と思われる^[33]には伊尹という忍術の達人が殷の湯王に仕えており、彼は夏の桀王の国に忍び込んで、これを亡ぼしたという。その事は『孫子』に、「湯王の殷が興つた時、伊摯という人物が夏に居り、この伊摯が伊尹である」とある。殷が夏を討ち、湯王が暴君桀王を南巢（現在の安徽省巢湖西南の地）に放逐したことは皆もよく知る処だが、伊尹が五回も殷側と夏側を行き来した事は知る者はいない。これこそ伊尹が間者として行動していたという証である。

②周者武王有天下之號也呂牙太公望也商謂商王紂也言周之初興也人皆知牧野之誅獨夫而已然不知呂牙之在商始獻女貨經修陰謀之為間也、」

現代語訳：P47（『完本「万川集海」』）

周は武王。天下人の号である。呂芽とは太公望であり、商の紂王は人民を虐げていた。呂芽は商に入り、女や金銭を紂王に献じて鉄壁の謀略を敷いた云々。

③「注ニ言トハ間事也ト云々」

現代語訳：P47（『完本「万川集海」』）

言とは間のことである云々

『武經七書匯解』原文…(用間)

①「殷湯有天下之號伊摯即伊尹也夏謂夏王桀也周武王有天下之號也呂牙太公望也商謂商王紂也。(直解)」

②「趙克榮曰人皆知南巢之放暴主而已矣而不知伊尹之五就于桀五就于湯伊之為間也人皆知牧野之誅獨夫而已矣然不知呂牙之在商始獻女貨經修陰謀呂之為間也。(彙解)」

③「種以心機生意言儘也言謂間諜中事(唐李問對匯解・上卷・直解)」

比較…

『李衛公問對』の引用の①、②と同じところに引用されたもので、参照する。

この引用の内容は、伊尹と呂牙間諜であることを証明しながら間諜の重要性を述べている。間諜を用いて、天下を変えるとのことである。特に矛盾する所はない。

『武經七書匯解』は内容が豊富で注家も繁多である。巻首には「引用書目」が掲載され、『易経』、『詩経』、『周礼』など八十五種類もあり、「注釈先賢」には曹操、杜牧、李筌、歐陽修など八十三人、珍しく散逸された注釈もある^[25]。

その構成だが、一卷孫子、二卷呉子、三卷司馬法、四卷唐李問對、五卷尉繚子、六卷三略、七卷六韜、末巻で全部八巻からなっている。そして内容だが、七書の原文はすべて書かれ、原文の後に、「直解」、「彙解」、「開宗」などの条目がある。「直解」というのは漢文を平話で訳すことであり^[26]、「彙解」は、主に他の注釈を引用することにより、説明する。例えば「李筌曰氣盛力積加之以謀慮則使非敵之可測」、「賈林曰軍無五間如人無耳目也」。「開宗」は主旨を述べている。

『武經七書匯解』原文の引用①は「直解」の所にあり、②は「彙解」の所にある。『万川集海』ではこの二つの文を混せて引用した。

現在中国においては、『武經七書匯解』に関する研究、論文などが少ない。

大庭脩による『江戸時代における唐船持渡書の研究』では、「明和五戊子年 武經七書匯解 一部二套」と書かれている。

また、「言謂間諜中事」とは恐らく『匯解』だけに説かれている。

問題点…

『李衛公問對』の引用①②と『武經七書匯解』の引用①②と同じところにあること、また「注ニ言トハ間事也ト云々」というのは「『武經七書匯解』…「種以心機生意儘也言謂間諜中事」と一致することで、著者は間違いなく『武經七書匯解』を参考した。

(伊賀流忍者博物館に所属している沖森本『万川集海』のこの部分をも読んでいただき、甲賀本と一緒に確認した。)しかし『武經七書匯解』は一番早く発行さ

れた時間は一六八八年であるが、『万川集海』の成立した時間は一六七六年である。矛盾して一二年も早かった。

福島嵩仁の「『万川集海』の伝本研究と成立・流布に関する考察」により、「『万川集海』に収録された各巻は、すべてが同じ年に成立したのではなく、一部成立年が違う巻も存在するという事実も導き出すことができた。さらに従来、延宝四年（一六七六）に成立したと考えられてきた『万川集海』は、それよりも後に成立した可能性も浮上した。」と書かれ、確認できたといえる。『江戸時代における唐船持渡書の研究』に書かれた「明和五戊子年」とは一七六八年でさらに九二年もずれているため、情報が漏れた可能性が高い。

故に『万川集海』巻一の忍術問答は少なくとも一六八八年以降に書かれたものであることが確定できるだろう。

《第三章》 儒教書籍の引用

《第一節》 『論語』

『論語』は、孔子とその高弟の言行を、孔子の死後に弟子が記録した書物である。儒教の經典である經書の一つで、朱子学における「四書」の一つに数えられる。その内容の簡潔さから儒教入門書として広く普及し、中国の歴史を通じて最もよく読まれた本の一つである。古くからその読者層は知識人に留まらず、一般の市民や農民の教科書としても用いられていた。

三世紀の終わりごろ、応神天皇の時代に百済の博士である王仁が『論語』十巻と『千字文』一巻を持ち帰ったことが『古事記』に記載されている。七一八年に編纂が始められた『養老律令』においては、教授の際に用いるべき注釈として『論語』の鄭玄注・何晏注が挙げられており、既に大学での教授や官吏登用の際の必読書とされていたことが分かる。

藤原佐世の『日本国見在書目録』にも、「論語十卷鄭玄注」「論語十卷何晏注」「論語義疏皇侃撰」などが著録されている。『論語集解』は、正平一九年（一三六四年）に初めて木版出版され、いっそう普及した。

江戸時代に入ると、伊藤仁斎や荻生徂徠らによって優れた注釈が作られ、一部は中国に逆輸入されて受容された^[27]。

『万川集海』における、『論語』からの引用は八箇所ある。

① 『万川集海』原文：卷二・正心第一・P513（『完本「万川集海」』）

「語曰不患不知於人之已也患不知与人」

現代語訳：P54（『完本「万川集海」』）

人が我を知らないのは憂い悲しむ必要は無く、むしろ自分がその人を知らない事を嘆くべきだ。

『論語』原文：（学而）

「子曰：『不患人之不己知，患不知人也。』」

比較：

『万川集海』現代語訳には、特に問題がない。忍者は（自分のことがわかるが、他人の心がわからない）人に騙されないように、常に注意すべきである。

②『万川集海』原文：卷二・正心第一・P514（『完本「万川集海」』）

「孔子曰言可以折獄者，其由也」

現代語訳：P54（『完本「万川集海」』）

方言で判断出来るほどの信頼が必要だ。

『論語』原文：（顔淵）

「子曰：「片言可以折獄者，其由也與？」」

比較：

現代語訳では意味が少々ずれている。

『論語今注今譯』…単方の話によっても裁判できるのは、子路に違いない。

子路は常に信を深く、周りに信頼をもらっているわけである。

『万川集海』では、この引用の前に、子路の話为例にして、信（誠実）の重要性、また有難さなどが説かれている。

③『万川集海』原文：卷二・正心第一・P515（『完本「万川集海」』）

「孔子曰小不忍則乱大謀」

現代語訳：P55（『完本「万川集海」』）

小事を忍ばなければ大謀が乱れる。

『論語』原文：（衛靈公）

「子曰：「小不忍則亂大謀。」」

比較：

『論語今注今譯』…小さい事に忍べなければ、大謀が失敗になる。小事を忍ぶことの大切さを強調している。前後が一致しているので、矛盾がない。

④『万川集海』原文：卷二・正心第一・P515（『完本「万川集海」』）

「語曰人而無遠慮必有近憂」

現代語訳：P55（『完本「万川集海」』）

遠慮なくば必ず近憂が発生する。

『論語』原文：（衛靈公）

「子曰：「人無遠慮，必有近憂。」」

比較：

『論語今注今譯』…人は日常生活に対して、考慮しなければ、困難がいつ来てもおかしくない。

人は欲望に溺れて、楽だけに沈んで、未来には必ず不幸がある。忍者はもちろん同じである。常に欲望を抑え、正心に従う事が重要である。

⑤『万川集海』原文：卷二・正心第一・P516（『完本「万川集海」』）

「暴虎馮河而死而無悔者吾不與也必也臨事而懼好謀而成者也」

現代語訳：P57（『完本「万川集海」』）

暴れ虎が黄河を渡ろうとして死に、おまけに後悔もしないような者とは、私は共に仕事しない。そんな人は大事な時には恐れてしまい、謀のみを好んで行動をしない者である。

『論語』原文：（述而）

「子曰：『暴虎馮河，死而無悔者，吾不與也。必也臨事而懼，好謀而成者也。』」

比較：

現代語訳では意味がずれている。注意したい。

『論語本解』…何も持たずに虎を倒そうとし、船に乗らずに川を渡ろうとし、（このせいで）死んでも後悔しない人は、私は彼と一緒に仕事しない。必ず事に対して慎んで考慮し、よく謀略を立てから成功を取る人と共に仕事したい。

これは義理の勇と血気の勇との違いである。忍者は決して血気の勇に従えない。孔子がまさに血気の勇を反対し、謀略がある義理の勇を提唱している。

六一

⑥『万川集海』原文：卷二・正心第一・P518（『完本「万川集海」』）

「子曰獲罪於天無所祈也。」

現代語訳：P58（『完本「万川集海」』）

天に反する罪を犯して祈る事自体無意味である。

『論語』原文：（八佾）

「王孫賈問曰：『與其媚於奧，寧媚於竈，何謂也？』子曰：『不然，獲罪於天，無所禱也。』」

比較：

『論語本解』…王孫賈が問う…奥神に祈ることよりも、むしろ竈神（竈神の位は奥神より下である）に祈るほうがいいのはいかがだろうか。孔子が曰く…そうではない、天に反して、罪を犯したら、どの神に祈っても何もならない。

ここは、朱熹の『論語集註』の引用もあるので、参考に『論語集註』を記す。

朱熹は天とは理であると注をした。また理とは事の真理、万物の規律である。これが『万川集海』の天理と似ている内容だと思われる。故に忍者は天理に従い、行動すべきである。天（天理）に反してはならない。

⑦『万川集海』原文：卷三・正心第二・P526（『完本「万川集海」』）

「孔子曰死生有命富貴在天」

現代語訳：P53（『完本「万川集海」』）

生死は天命で決まり、富貴は天の御加護による。

『論語』原文：（顔淵）

「司馬牛憂曰：「人皆有兄弟，我獨亡。」子夏曰：「商聞之矣：死生有命，富貴在天。君子敬而無失，與人恭而有禮。四海之内，皆兄弟也。君子何患乎無兄弟也？」

比較：

『論語本解』…司馬牛が愁えている…人は皆兄弟がいる、私だけにはいない。子夏が答え…私は「死生は運命で決まり、富貴は天による」という話を聞いた。君子は常に慎んで過失がなく、人を尊敬して礼儀正しくすれば、四海（天下）の内では皆兄弟である、故に君子は兄弟がないことに憂えることはない。

『論語本解』の注…子夏は宿命論でありながら、人の主観能動性をも強調する。これは孔子と一致している。当時では宿命論の観念は揺れている。

『万川集海』では、ここは死に恐れず、「必死則生」というのを強調している。すなわち宿命論である。それで「死生有命，富貴在天」だけを引用した。矛盾することはないが、後の内容を読んだら、人の主観能動性により、運命を変えることもできる。

⑧『万川集海』原文：卷十六・遁甲篇・P668（『完本「万川集海」』）

「子曰民可使由之，不可使知之」

現代語訳：P39（『完本「万川集海」』）

民は日時方で動かし、日時方の方法を分からせてはならない。

『論語』原文：（泰伯）

「子曰：「民可使由之，不可使知之。」」

比較：

『論語本解』…百姓は道により動かすが、その道の真意を分からせない。

『論語本解』により、「之」とは「道」のことを指している。道というのは事の道理、規律である。この文だが、中国において、いつかの解釈があるが、一番広く知られ

ているのは『論語本解』にある解釈である。即ち、百姓は道理に従い、行動すればいい、その道理の深い真意はわからなくても構わない。

『万川集海』では、ここは遁甲篇で、忍者は遁甲の知識を身につけて、適当な時期に活用する。將軍は策を立て（例えば吉の方向を示す、軍を興奮させる）、一般の兵士は従うだけでは十分である。

現代語訳では、「之」は「日時方」と訳したが、狭いかもしれないが、遁甲篇のため、理解できる。

まとめ：

『論語』からの引用は主に正心の所に集中している。すなわち、正心は儒教思想に強く影響されたといえよう。また、引用の比較からみると、特に矛盾していない。

ただし、中国儒教思想に主張された「仁」・「義」・「礼」・「智」・「信」（「五常」ともいう）と違い、忍者の正心とは「仁」・「義」・「忠」・「信」である。その意味については：

「仁」…温和慈愛の道理である。心をまるやかに潤わせ、和やかで何事をも憐れんで、恵の心を持つことをいうのである。

「義」…断制裁割の道理である。その時の理によって変化し、時や所になつた道理に従って行うことをいう。また恥を知りことも義である。

「忠」…己の心を尽くしつくすことをいう。

「信」…すべての物に真実の誠があることで、毛頭偽りやでたらめなことがないことをいう。

中国では、

朱子学は「仁」を「温和慈愛」の道理と説き、『孟子』には「仁」すなわち思いやりの心で、人は本来持っている心であると述べられている。『論語』は親孝行が仁の行為だと言っている。また「義」を「断制裁割」の道理とするのは、同じく朱熹『玉山講義』に、『孟子』「離婁下」に「非礼の礼、非義の義、大人はなさず」のように記されている。そして、「忠」とは主君に真心を尽くすというのも古代中国の「忠君思想」また「三綱」と一致している。それから「信」とは誠実であることは『論語』を始め、沢山な儒教書籍に書かれているため、「仁」、「義」、「忠」、「信」の意味については、両方にはほとんど違いがないと言える^[38]。

しかし、儒教「五常」（仁義礼智信）と忍者の正心は本来にも違うものであり、著者は儒教思想に影響され、儒教書籍を参照して「正心」を提出したことは考えられるが、一緒にしてはいけない。

著者は忍びが窃盗と区別できるよう、また忍びに正義を求めるように忍びに「正心」を要求していると思われる。即ち、忍びとしては、まず根本である正心を求める。でなければ、悪人になりやすく、身を亡ぼすことになってしまう。「正心」の提出により、忍びに「正義性」を与え、心を強くすることができから著者は強調しているわけである。

〈第二節〉『大学』

『大学』は、儒教の経書の一つである。南宋以降、『中庸』『論語』『孟子』と合わせて四書とされた。もともとは『礼記』の一篇であり、曾子によって作られたとも秦漢の儒家の作とも言われる。

四書に含まれたことにより、東アジア全域で広く読まれた。特に江戸時代後期の日本では、『經典余師』などの注釈書・訓蒙書が盛んに作られ、向学心のある庶民に広く読まれた。一説には、二宮金次郎が薪を背負いながら読んでいたのも本書であるとされる。また、パロディの対象にもなり、関亭京鶴『傾城情史 大客』などの戯作・洒落本や、古典落語の廓噺の演目『廓大学』などが作られた^[29]。

『万川集海』において、『大学』からの引用は二箇所ある。一つ目は「孔子曰」と書いているが、実は『大学』の内容である。

①『万川集海』原文：卷二・正心第一・P512（『完本「万川集海」』）

「孔子曰ソノ本乱而未治者否也」

現代語訳：P53（『完本「万川集海」』）

幹が乱れば、末は決して治まり得ない。

『大学』原文：

「自天子以至於庶人，壹是皆以修身為本。其本亂而未治者否矣，其所厚者薄，而其所薄者厚，未之有也！此謂知本，此謂知之至也。」

比較：

これは『大学』の内容である。

『大学今注今譯』…天子から庶民まで、すべては修身を根本とする。でなければ根本が乱れ、他の事は（治国、平天下など）うまくできるとは不可能である。自分に近い身家を重視しなく、かえって治国、平天下を重視することはあり得ない話である。

故に「本乱而未治者否也」とは、「本」の修身を重視し、「治国」、「平天下」を「末」としている。根本があつてから、末がある。「本」とは事の根本であり、「末」とは事の表面であると認識できる。

『万川集海』では、「正心」を「本」として、「陰謀佯計」を「末」とすると説かれている。著者は「正心」を重視すべきであると忍者に注意を起こさせる。正心を失えば、露見しやすくなり失敗するわけである。

②『万川集海』原文：卷二・正心第一・P512（『完本「万川集海」』）

「大学曰心不在焉視而不見聽而不聞食而不知其味」

現代語訳：P53（『完本「万川集海」』）

心が焉すなわち正心にして艶やかで無ければ、視ても分ならず、聴いても、本質を聞き落とす、御馳走でさえも美味しく食べられない。

『大学』原文：

「心不在焉，視而不見，聽而不聞，食而不知其味。此謂修身在正其心。」

比較：

①と同じところがあるので、参考になる。これも正心についての内容である。現代語訳には問題がないが、焉の解釈について：

『万川集海』では、（原本）「焉トハ仁義忠信指云也」、即ち「焉」とは「正心（仁義忠信）」である。

だが、中国方面では、「焉」とは之、彼、此処という意味で、この文を訳したら、心はここがない（集中しない）と見ても分ならず、聞いても分ならず、食べても味わえないという意味になる。

『万川集海』では、著者は「焉」を別の解釈にし、「焉」とは「仁義忠信」（正心）である。このことについて、山田雄司先生が「焉の字について、上の部分を『正』、下の部分を『心』と読めば、この字が「正心」をあらわしていると解釈したいのでは」と註して、本人も非常に賛成している。

正心の重要性が強調することで、この文を引用したという、特に問題がない。

まとめ：

②の所に焉の意味について、『万川集海』は『大学』と大きく外れているが、必ず『万川集海』のほうが間違つたとは言えない。著者の立場により、「焉」を「正心」にすると、説明しやすくなり、読者も理解しやすいだろう。

〈第三節〉『孟子』

『孟子』は、儒教の思想家・哲学者である孟子の逸話・問答の集成である。歴史は紀元前四世紀後半まで遡る。

儒教の古典として位置づけられ、宋朝時代に重んじられた。一般に新儒学の創始者とされる学者の朱熹は、『孟子』を儒教正典の四書に含め、後に『孟子』は新儒学の正典のひとつとなった。鎌倉時代に『孟子』は宋学の一部として日本に伝来し、江戸時代から日本人に爆発的に普及するようになった^[30]。

『万川集海』において、『孟子』からの引用は二箇所ある。

①『万川集海』原文：卷一・凡例・P500（『完本「万川集海」』）

「天時天父ヲ第五ニ置事天時不如地利地利不如ト先賢ノ教ニ元ツキテ也」

現代語訳：P42（『完本「万川集海」』）

天時は地の利に及ばず、地の利は人の和に及ばずという先賢の教えがあり、それに基づいた方法である。

『孟子』原文：（公孫丑下）

「孟子曰：天時不如地利，地利不如人和。」

比較：

原文の「天時不如地利地利不如ト」のところ、「不如」の後に「人和」が漏れたと推測する。つまり、「天時不如地利地利不如人和ト」。

天時、地利、人和という概念は中国の兵法書には結構昔からもあった。（『司馬法』…順天，阜財，懾衆，利地，右兵，是謂五慮。『孫子』…故經之以五事，校之以計，而索其情，一曰道，二曰天，三曰地，四曰將，五曰法。『尉繚子』…又曰…「天時不如地利，地利不如人和。」聖人所貴，人事而已。）ただし、孟子がこの理論を具体的に論じていて、一番よく知られている。

『万川集海』では、此処は凡例の終わりの所で、天時、天文についての説明である。著者は「先賢の教え」だけ書かれているので、『孟子』からではない可能性もある。ただし、下の②の引用（遁甲篇にある）を参照すると、この先賢が孟子である可能性が非常に高い。

戦争において、著者は人和を重視すべきでありながら、天時や地利の役目も軽視してはいけないと強調している。故に、天時の遁甲篇があった。

②『万川集海』原文：卷十六・遁甲篇・P668（『完本「万川集海」』）

「孟子曰三里之城，七里之郭環而攻之而不勝夫環而攻之必有得天時者矣而不勝者是天時不如地利也」

現代語訳：P184（『完本「万川集海」』）

三里の城を七里の郭で囲んで攻めたが勝てず。それを囲んで攻めても、必ず天の時を得られなかったのだろう。こうして勝てなかったのは、天の時は地の利に及ばなかったからである。

『孟子』原文：（公孫丑下）

「孟子曰：天時不如地利，地利不如人和。三里之城，七里之郭，環而攻之而不勝。夫環而攻之，必有得天時者矣；然而不勝者，是天時不如地利也。」

比較：

引用①を参照する。また『尉繚子』の引用を参照する。

現代語訳は意味がずれている。

『孟子今注今譯』…

郭：外の城也。

内城が三里、外城が七里である城を囲んで攻めたが勝てず、囲んで攻めるといふのは必ず天の時を得た。しかし勝てずというのは天時が地利に及ばない。

『万川集海』の遁甲篇はここから開始している。日取り、方取りなどについての説明で、「人和」の重要性と作用、また「天時」は末だが、無視してはいけないと説かれている。特に問題がない。

〈第四節〉『易経』

五経の一。伏羲（ふつき）氏が初めて八卦（はっけ）を作り、孔子が集大成したといわれるが未詳。天文・地理・人事・物象を陰陽変化の原理によって説いた書で、元来、占いに用いられた。六十四卦（け）およびそれぞれの爻（こう）につけられた占いの文章（経）と、易全体および各卦について哲学的に解説した文章（伝もしくは十翼という）とから成る。周代に流行したところから周易ともいう^[3]。陰陽五行思想や天干地支などは確かに『周易』から発源され、古代中国文化に深く影響を与えた。

『万川集海』において、『周易』からの直接引用は一箇所だけある。

『万川集海』原文：卷五・将知二・P538（『完本「万川集海」』）

「易曰其機事不密則害成」

現代語訳：P73（『完本「万川集海」』）

問者の機秘密が漏れると、味方には大害となる。

『周易』原文…（繫辭上）

子曰…「亂之所生也，則言語以為階。君不密則失臣，臣不密則失身，幾事不密則害成。是以君子慎密而不出也。」

比較…

『周易今注今譯』…災禍は常に言語不慎により起こす。君主が機密を守らなければ臣を失う。臣が機密を守らなければ命を失う。機密を守らなければ被害を及ぼすため、君子は機密を慎んで守って、他人と話さない。

『万川集海』では、これは忍術禁忌三箇条の三、「忍計ヲ取沙汰スル者ヲハ速ニ可見行死罪事」というところの引用である。機密を厳しく守るように提唱している。引用された内容も一致しているので、問題はない。

〈第五節〉『性理大全』

『性理大全』とは中国、宋の性理学説を分類集大成して編んだ書。七〇巻。永樂一三（二四一五）年に完成した。胡広らが王命によって撰した。『四書大全』（三六巻），『五經大全』（一五四巻）とともに永樂三大全といわれる。巻一から巻二五までは原書を収め、巻二六以下は項目を立てて、理氣、鬼神、性理、道統、聖賢、諸儒、学、諸子、歴代、君道、治道、詩、文の13目とし、それぞれについての諸家の説を程朱の説を中心に収録している^[32]。

『万川集海』では、『性理大全』からの引用は一箇所だけある。

『万川集海』原文…卷三・正心第二・P524（『完本「万川集海」』）

「天理也人亦理也循環則与天為一我非我也理也天也」

現代語訳…P61（『完本「万川集海」』）

天は理であり、人もまた理である。理に従えば天と一つになって、別人すなわち理であり天でもある云々。

『性理大全』原文…（卷三十四）

「上蔡謝氏曰天理也人亦理也循環則與天為一與天為一我非我也理也理非理也天也、」

比較…

『性理大全』の原文を現代日本語で訳すと…上蔡謝氏が曰く…天とは理である、人も理である。理に従えば天と一つになり、天と一つになったら我は我でなく、理である。理は理でなく、天である。

要するに、人は理に従えば、理になる。

著者は理の概念を出し、生死は理であるから、恐れるものではないと提唱している。特に問題がないが、古代中国の「宋明理学」における「理」は森羅万象とされ、その内容は自然世界だけではなく、人間社会においても複雑なことをも含んでいる。この点に注意したい。

〈第六節〉『論語集註』

『論語集註』は、南宋の儒学者である朱熹（朱子）による『論語』の注釈書。『四書集註』（『大学章句』、『中庸章句』、『論語集註』、『孟子集註』）に含まれる。何晏等による『論語集解』の「古注」に対して「新注」と称される^[3]。一箇所だけの引用があるが、『論語』引用の⑥のすぐあとに注として引用されたため、⑥を参照する。（『論語』の引用⑥：子曰獲罪於天無所祈也）

『万川集海』原文：卷二・正心一・P518（『完本「万川集海」』）

「朱子曰天即理也其尊無對非奧竈之可比逆理則獲罪於天矣豈媚于奧竈所能禱而免乎」

現代語訳：P58（『完本「万川集海」』）

天は理であり、その尊さは比較する物がないほどで、かまど神に祈った皆が火事をまぬがれているだろうか。神は正直者の頭に宿るもので、非礼者を守護してくれるはずがない。

『論語集註』原文：（八份第三）

「天，即理也；其尊无对，非奥竈之可比也。逆理，则获罪于天矣，岂媚于奥竈所能禱而免乎？」

比較：

『論語集註』原文を現代日本語で訳すと…天とは理である。その尊さは比較できるものはない。理に逆らえば、天に反して罪を犯す。奥神や竈神に諂って祈って罪を免れることはできない。

『万川集海』の現代語訳には少々外れているが、意味としては問題がない。

忍者は理に逆らうことはいけない。正心は理に一致するので、従うべきであると著者は言いたいのだろう。

《第四章》歴史書と文芸作品の引用

この部分の引用には物語を例として挙げたことが多い。著者は大抵物語のあらすじを書いて、その主人公が持つ貴重な精神や上手なやり方などを見せ、主張を提唱する。

〈第一節〉『史記』

『史記』は、中国前漢の武帝の時代に、司馬遷によって編纂された中国の歴史書である。二十四史の一つで、正史の第一に数えられる。計五二万六千五百字。著者自身が名付けた書名は『太史公書』（たいしこうしょ）であるが、後世に『史記』と呼ばれるようになるこれが一般的な書名とされるようになった。二十四史の中でも『漢書』と並んで最高の評価（史漢）を得ており、単に歴史的価値だけでなく文学的価値も高く評価されている。日本でも古くから読まれており、元号の出典として22回採用されている。その伝来時期は正確には判明していないが、聖徳太子の十七条憲法の典拠のひとつとして『史記』を挙げる見解がある^[34]。

① 胯下之辱

『万川集海』原文…卷二・正心第一・P515（『完本「万川集海」』）

「韓信ハ淮陰ノ人也若キ時常ニ好テ長劍ヲ帶ブ淮陰ノ少年ノモ集テ云ヤウス彼韓信ハ長劍ヲ好トモ心ハ臆病也市ノ中ニテ耻ヲ与ントテ一人ノ少年韓信ニ向テ汝死ナント思ワバ我ヲ刺セ死スマシキト思ワバ吾カ胯ヲク、レト云ケレハ韓信仰キ見テ頭ヲタレ伏テ胯ノ下ヲク、ル諸人は見テ大ニ笑フ韓信ハ大キナル志シ有二依テ纒ナル卑キ者ト死ナンコトヲ不思故ナリ後果メ漢ノ高祖ニ事テ數万ノ大將トナリ少勢ノ敵ニ逢フニ一度モ敗ラスト云コナク楚ノ項羽ヲ亡シ齊ノ国ノ侯ニ封セララル、」

現代語訳…P55（『完本「万川集海」』）

淮陰の韓信（漢の三傑の一人）は若い時は長劍を好んで帯刀していたので、若者達はい、「お前、我に殺されると思えば我を刺せ。死にたくなければ我股下を潜れ」と言った処、韓信は膝を付いて少年を仰ぎ見、頭を垂れて股を潜った。大衆はこれを見て笑った。この韓信には大志があつたので、こんな卑しい小者と刺し違えるような馬鹿な事はしない、と考えたのである。結局、韓信は漢の高祖に仕えて数万を従える大将になつた。小勢で敵と遭遇しても決して負ける事もなく、楚の項羽を亡ぼした後は斉の国を与えられた。

『史記』原文…（史記・列伝淮陰侯列傳）

「淮陰屠中少年有侮信者，曰：『若雖長大，好帶刀劍，中情怯耳。』」眾辱之曰：「信能死，刺我；不能死，出我袴下。」於是信孰視之，俛出袴下，蒲伏。一市人皆笑信，以為怯。」

分析…

胯下之辱の物語はよく知られて、『史記』をはじめ、多数の書籍には書かれている。著者は実に『史記』を参照にしたかどうかは確信できないが、後には『史記』からの引用もあるので、その可能性が高いと思われる。

この物語を通して、著者は耐え忍ぶことを提唱している。この引用の前に『論語』の「曰小不忍則乱大謀」の引用があり、杜牧の忍についての詩もあつて、全部忍ぶことを述べているため、矛盾することはない。

②『万川集海』原文…卷二・正心第一・P515（『完本「万川集海」』）

「法曰規小節者不能成榮名惡小恥者不能立大功」

現代語訳…P515（『完本「万川集海」』）

細々した節目に難癖をつける者は、榮名を得られない。また小さな恥を憎むようでは、大功は立てられない。

『史記』原文…（史記・列伝魯仲連鄒陽列傳）

「且吾聞之，規小陽者不能成榮名，惡小恥者不能立大功」

比較…

これは元々『史記』の文だが、「法曰」と書かれているため、どこかを参考にしたのである。『論語』引用の③と同じところにあるので、参照する。

『史記全訳』…子節にこだわる人はいいい名声にならない、小さい恥に耐え忍べない人は大功を遂げない。

現代語訳の意味は同じく、特に問題がない。忍ぶことについての引用である。

③『万川集海』原文…卷五・将知二・P538（『完本「万川集海」』）

「史記曰事ハ以密成語ハ以泄敗ル」

現代語訳…P73（『完本「万川集海」』）

事は内密を以て成就し、密談はもれば敗れる。

『史記』原文…（老子韓非列傳）

夫事以密成，語以泄敗。

比較…

『孫子』引用の⑩と『周易』の引用を参照する。

機密保持についてだが、意味として…

『史記全訳』…事は密を保つことで成功になる、言語で密が漏れ、失敗になる。

忍術の禁忌三カ条の三…忍計を取り沙汰する者は即刻死罪とし、それを秘密保持の為の見せしめにする事

ゆえに機密を守ることで、引用にも一致するので特に問題がない。

④鶏鳴狗盜

『万川集海』原文…卷五・将知二・P559（『完本「万川集海」』）

「齊ノ孟嘗君秦ノ昭王ニトラハレテ白狐ノ裘ヲ后妃ニ賄ヒテ獻セシニ依テ襟ヲ遁レテ夜潜ニ逃ル夜深メ函谷關未開夜ヲ明サバ追手來ンフヲ憂フ爰ニ三千ノ客ノ中ニ鶏鳴ヲ能スル人其名ヲ田甲ト云フ木ニ登テ鶏ノ鳴ヲナス其時関路雞モ盡ク鳴ク於是関守夜明ト思開関テ通ス」

現代語訳：P94（『完本「万川集海」』）

齊の孟嘗君が秦の昭王に捕われた時に、后妃に用意していた白狐の皮衣を賄賂として献じた。これで禁足が緩んだので夜陰に紛れて密かに逃走したが、まだ朝が早かったので函谷関（河南省北西部にある交通の要地で秦代には靈宝県にあった。河南省洛陽から潼関に至る隘路で、古来有名な攻防戦の地である）の門は閉ざされていた。夜明けには追手が迫り来るので気が気ではなかったが、よく調べてみると、門前に居た三千の大衆の中から鶏の鳴声が上手な田甲という人物を見付けた。頼んで木の上から鶏の声を出させた処、関路の鶏が一斉に鳴き始めた。関守は夜明けと勘違いして門を開けて人を通したという（「函谷関の鶏鳴」）。

『史記』原文…（孟嘗君列傳）

「齊湣王二十五年、復卒使孟嘗君入秦、昭王即以孟嘗君為秦相。人或説秦昭王曰…

「孟嘗君賢、而又齊族也、今相秦、必先齊而後秦、秦其危矣。」於是秦昭王乃止。囚孟嘗君、謀欲殺之。孟嘗君使人抵昭王幸姫求解。幸姫曰…「妾願得君狐白裘。」此時孟嘗君有一狐白裘、直千金、天下無雙、入秦獻之昭王、更無他裘。孟嘗君患之、遍問客、莫能對。最下坐有能為狗盜者、曰…「臣能得狐白裘。」乃夜為狗、以入秦宮臧中、取所獻狐白裘至、以獻秦王幸姫。幸姫為言昭王、昭王釋孟嘗君。孟嘗君得出、即馳去、更封傳、變名姓以出關。夜半至函谷關。秦昭王後悔出孟嘗君、求之已去、即使人馳傳逐之。孟嘗君至關、關法雞鳴而出客、孟嘗君恐追至、客之居下坐者有能為雞鳴、而雞齊鳴、遂發傳出。」

比較…

忍者が物真似などを習熟することによって行動すること。著者はこの例をあげ、物真似のおかげで孟嘗君が逃げ出したという。この物語を通して著者は物真似の強さを示したいのだろう。

あらずじは『史記』と同じく、特に問題がない。この引用の後に、同じ『史記』からの引用もある、即ち陳勝という人は秦二世の統治に不満を持ち、呉広と一緒に策を立ち、狐の鳴き声を真似して起義したという。これも物まねのことであり、特に問題がない。これらの物語は結構世間に知られているため、起源は『史記』であることは明晰であるが、他の古典にも沢山書かれたことも事実である。ゆえに『万川集海』の著者は実際に『史記』を読みながら引用したのかは確定できない。この点に注意したい。

⑤ 関与の戦い

『万川集海』原文：卷八・陽忍上・P569（『完本「万川集海」』）

「秦ノ將軍関與ト云モノヲ攻ル時関與ト趙奢トハ蘭金ノ交アルニヨリ趙奢関與ヲ救ントメ行ノ二十里程ニメ一城ヲ構堀ヲ深シ壁ヲ堅メ留ルノ二十八日時ニ秦ヨリ間者來テ趙奢力様体ヲ窺見ケリ趙奢是ヲ知リツツ知ラヌ体ヲメ関ヲ救フノハ中々及難シナト彌囂ヲ高ケシ箆城ノ用意ヲ專一トスル様体ヲ示ス秦ノ間者販テ秦ノ將ニ斯ト告ケレハ將大ニ喜ンテ曰趙カ関ヲ不救ノ必定セリ心易ク関ヲ攻ント軍ヲ出ス趙ハ秦ノ間者ノ販ルト等ク甲ヲ巻旗ヲ伏テ趨ルノ三十里許リ引テ北山ニ攀登テ數万人秦軍ノ來ルヲ待カケタリ秦將此事思ヒガケレク來ル所ヲ其不意ニ趙奢ガ勢討テ出ル秦軍終ニ敗軍セシ、」

現代語訳：P94（『完本「万川集海」』）

秦の將軍が関与という者を攻めた時、関与と趙奢とは金蘭の交わりだったので趙奢は関与の救援に行く事二十里に一城を構えた。堀は深く城壁は厚く強固にし、在城二十八日間。その時に秦の間者が忍び込んで趙奢の様子を窺った。趙奢はそれに気付いたが、知らぬふりをして、敵忍に「関与の救援は中々難しい」と聴かせて石垣を高くして籠城だけの用意をして撃って出る等はない様な素振りをした。秦の間者は戻ってその旨を報告すると、将は大喜びして「趙奢は関与を救う事は完全に諦めており、これで気易く関与攻撃に専念出来る」と言って進軍した。ところが趙奢は秦の間者が帰ると同時に甲を巻き、旗を伏して走る事三十里ばかり引いて北山に登り、秦兵数万人の進軍を密かに待ち、来た処を突然討って出て秦軍を敗走させた。

『史記』原文：（廉頗藺相如列傳）

「秦伐韓，軍于闕與。王召廉頗而問曰：“可救不？”對曰：“道遠險狹，難救。”又召樂乘而問焉，樂乘對如廉頗言。又召問趙奢，奢對曰：“其道遠險狹，譬之猶兩鼠鬪于穴中，將勇者勝。”王乃令趙奢將，救之。兵去邯鄲三十裏，而令軍中曰：“有以軍事諫

者死。”秦軍軍武安西，秦軍鼓噪勒兵，武安屋瓦盡振。軍中候有壹人言急救武安，趙奢立斬之。堅壁，留二十八日不行，復益增壘。秦閑來入，趙奢善食而遣之。閑以報秦將，秦將大喜曰：“夫去國三十裏而軍不行，乃增壘，閑與非趙地也。”趙奢既已遣秦閑，卷甲而趨之，二日壹夜至，今善射者去閑與五十裏而軍。軍壘成，秦人聞之，悉甲而至。軍士許曆請以軍事諫，趙奢曰：“內之。”許曆曰：“秦人不意趙師至此，其來氣盛，將軍必厚集其陣以待之。不然，必敗。”趙奢曰：“請受令。”許曆曰：“請就鈇質之誅。”趙奢曰：“媾後令邯鄲。”許曆復諫，曰：“先據北山上者勝，後至者敗。”趙奢許諾，即發萬人趨之。秦兵後至，爭山不得上，趙奢縱兵擊之，大破秦軍。秦軍解而走，遂解閑與之圍而歸。」

比較・

天唾術の二カ条にこの例を挙げている。天唾術とは敵の間者を味方にし、敵に害を与える。即ち、「反間」にあたる。この物語では趙奢は真の目的を隠してわざと偽りの情報流し、間接的に敵忍を反間にして謀略を立てたという。相応しい引用である。両方の粗筋はほぼ同じであり、「敵忍」を利用することも一致している。ただし、『史記』において、閑與というのは地名であり、人の名前ではない。この点からは、著者は直接『史記』を参照にして『万川集海』を書いた可能性が低い。この点はとても重要である。一体何に基づいてこのように書かれただろう。

まとめ

『史記』からの引用は確信できるのが一箇所あるが、他はその起源が『史記』であるといえるが、著者は同じ内容が書かれた他の書物から参照した可能性もある。また、引用そのものは矛盾することは特にない。

〈第二節〉『三国志』

『三国志』は、中国三国時代について書かれた歴史書である。著者は陳寿である。後漢の混乱期から西晋による中国統一までを扱う。二十四史の一つである^[35]。

『万川集海』において、引用は物語を例にして挙げたという。

羊陸之交

『万川集海』原文：卷二・正心第一・p513（『完本「万川集海」』）

「唐ノ羊祐ハ晋ノ大將ナリシ刀敵ノ大將陸孫軍中ニナン煩ケレハ羊祐聞テ我カ旧友ナリトテ薬ヲ贈リシヲ陸孫疑氣也モナク受テ服シケリサレハ如何ニ旧友ノ仙薬也トモ敵ノ送り

侍ラハ計略カト可思ニ羊祐ニ信実至テ深キ故ニ陸孫飲ケリ敵將スラ斯有ケレハ軍中ノ士卒羊祐刀言行ヲ渴仰シ可察知、

現代語訳：p73（『完本「万川集海」』）

唐の羊社は晋の大將であつたが、敵の大將陸孫が戦の最中に病で倒れた時に薬を贈つた処、陸孫は全く疑う事無く、その仙薬を服用した。敵の将軍でも、羊裕であつたが故の信頼である。部下の士卒が彼の命令を心待ちにするのも当然であり、推して知るべし。

『三国志』原文：（呉書十三陸遜傳注）（『晋書』…列傳第四羊祐にもある、

内容は主に一緒である）

「晉陽秋曰…抗與羊祐推僑、札之好。抗嘗遺祐酒，祐飲之不疑。抗有疾，祐饋之藥，抗亦推心服之。于時以為華元、子反復見於今。漢晉春秋曰…羊祐既歸，增脩德信，以懷吳人。陸抗每告其邊戍曰…「彼專為德，我專為暴，是不戰而自服也。各保分界，無求細益而已。」於是吳、晉之間，餘糧栖畝而不犯，牛馬逸而入境，可宣告而取也。沔上獵，吳獲晉人先傷者，皆送而相還。抗嘗疾，求藥於祐，祐以成合與之，曰…「此上藥也，近始自作，未及服，以君疾急，故相致。」抗得而服之，諸將或諫，抗不荅。孫皓聞二境交和，以詰於抗，抗曰…「夫一邑一鄉，不可以無信義之人，而況大國乎？臣不如是，正足以彰其德耳，於祐無傷也。」或以祐、抗為失臣節，兩譏之。習鑿齒曰…夫理勝者天下之所保，信順者萬人之所宗，雖大猷既喪，義聲久淪，狙詐馳於當塗，權略周乎急務，負力從橫之人，臧獲牧豎之智，未有不憑此以創功，捨茲而獨立者也。是故晉文退舍，而原城請命；穆子圍鼓，訓之以力；冶夫獻策，而費人斯歸；樂毅緩攻，而風烈長流。」

「（『晋書』原文…祐與陸抗相對，使命交通，抗稱祐之德量，雖樂毅、諸葛孔明不能過也。抗嘗病，祐饋之藥，抗服之無疑心。人多諫抗，抗曰…「羊祐豈鳩人者！」時談以為華元、子反復見於今日。抗每告其戍曰…「彼專為德，我專為暴，是不戰而自服也。各保分界而已，無求細利。」孫皓聞二境交和，以詰抗。抗曰…「一邑一鄉，不可以無信義，況大國乎！臣不如是，正是彰其德，於祐無傷也。」）

比較…

粗筋はほぼ同じだが、（『万川集海』では、陸抗ではなく陸孫である）お互いに敵だとしても、抗は祐に酒を与え、祐は躊躇もなく飲んだ。抗は病氣にかかり、祐は薬を送り、抗も疑心なく飲んだ。お互いに信用が高いといえる。

著者は信について、羊陸之交という物語を引用することはとても相応しいだろう。ただし、著者は具体的に『晋書』か『三国志』か、また他の歴史書などを参照にしたかは確定できない。そして、『万川集海』の原文には、「唐ノ羊祐ハ晋ノ大將ナリ」の「唐」は間違えて書いてしまった可能性が高いだろう。

〈第三節〉『左傳』

『春秋左氏伝』は、孔子の編纂と伝えられている歴史書『春秋』（単独の文献としては現存しない）の代表的な注釈書の一つで、紀元前七〇〇年頃から約二五〇年間の魯国の歴史が書かれている。通称『左伝』。『春秋左氏』『左氏伝』ということもある。現存する他の注釈書『春秋公羊伝（公羊伝）』『春秋穀梁伝（穀梁伝）』とあわせて春秋三伝（略して三伝）と呼ばれている。前漢末の劉歆によって、後漢では三伝の中で『左伝』が一番高く評価された。これは撰者の左丘明が孔子の弟子であるためとされた

[36]。

季路一言

『万川集海』原文：卷二・正心第一・P514（『完本「万川集海」』）

「小邾國ノ射ト云者魯國ト会盟スル時射曰子路ト我約束スルナラハ魯國ト小邾國ノ盟ヲ止ン云リ盟ヲ不信シテ子路カ一言ノ約ヲ信スルト有難リトニ非ズヤ是平生子路真実フカキニ因テ小モ偽ナキ者ト人見付タル故也、」

現代語訳：P54（『完本「万川集海」』）

小邾国〔春秋戦国時代、山東省にあった。後に鄒と改名〕の射という人物が魯国と会盟した時、射は「私が子路と約束したのなら、両国との盟約は結べない」と言った。すなわち、国家間の盟約よりも「子路の一言」の方を重視する。なんと有難い事だろうか。これは、子路は常に偽りなき真実の人、と認められている結果から生まれる成功である。

『左傳』原文：（卷十五）

「小邾射以句釋來奔，曰：使季路要我，吾無盟矣。使子路，子路辭。季康子使冉有謂之曰：千乘之國，不信其盟，而信子之言，子何辱焉？對曰：魯有事于小邾，不敢問故，死其城下可也。彼不臣而濟其言，是義之也。由弗能。」

比較：

『左傳全訳』によると、射（身分が高い）は自分の国から逃げ、魯國に来た。そして、子路と口頭の約束をすれば、正式な会盟をしなくてもいい。故に、子路は信が深いと知られている。それからの内容だが、子路は射に断り、行かなかったが、『万川集海』において、著者は前の部分だけを引用し、信についての説明なので、特に問題がない。

〈第四節〉『宋書』

『宋書』（そうしよ）は、中国南朝の宋の六〇年間について書かれた歴史書。宋・齊・梁に仕えた沈約（四四一年〜五一三年）が南朝齊の武帝に命ぜられて編纂した。本紀一〇卷・列伝六〇卷・志三〇卷の計一〇〇卷からなる紀伝体。二十四史の一つである[37]。

王鎮惡の物語

『万川集海』原文…卷三・正心第二・P.529（『完本「万川集海」』）

「唐の王鎮惡ト云者秦ノ國ヲ征伐ノタメ數千人ヲ引卒シ兵船ニ取衆リ遙ノ海上ヲ経テ秦ニ起ク秦國ノ清橋ト云所ニ着テ舟ヨリ上リ兵糧衣類ヲハ其俛舟ニ入置甲冑器械ハカリヲ舟ヨリ取上ケ山ニ登リ其夜ノ風ニ任セテ舟ヲ放ツ其後王鎮惡軍勢ニ向テ曰舟楫衣類兵糧盡ク流レタリ我カ長安城ヘハ万里ノ海上也此上ハ進シ戰テ不勝トキハニタヒ本國ヘ皈ルテ叶フマシト云是ヨリ軍勢ノモ臆病者武偏ニナリ死武者ニ成テ身ヲ捨功リ先ニタト争ヒ進シケレハ終ニ秦ノ大國大ニ勝ツ、」

現代語訳：P.65（『完本「万川集海」』）

唐の王鎮惡という人が数千の兵を兵船に乗せて遙か彼方の秦國に遠征した。上陸した秦の清橋という所で、甲冑や武器以外の全てすなわち兵糧や衣類全部を船に残して山に登り、船を流した。王は振り返って兵に言った。「我々の長安城は万里の海の彼方にある。船が離れた以上、前進して戦い、勝つ以外に帰国は叶わない」と訓示すると、臆病な兵まで武勇に奮い立ち、死武者となって身を捨て、先陣を争って突撃し、その結果は大國秦に勝つ事が出来たのである。

『宋書』原文…（卷四十五列傳第五王鎮惡）

「大軍次潼關，謀進取之計，鎮惡請率水軍自河入渭。偽鎮北將軍姚弋仲兵涇上，鎮惡遣毛德祖擊破之，直至渭橋。鎮惡所乘皆蒙衝小艦，行船者悉在艦內，羌見艦溯渭而進，艦外不見有乘行船人，北土素無舟楫，莫不驚惋，咸謂為神。鎮惡既至，令將士食畢，便棄船登岸。渭水流急，倏忽間，諸艦悉逐流去。時姚泓屯軍在長安城下，猶數萬人。鎮惡撫慰士卒曰…「卿諸人並家在江南，此是長安城北門外，去家萬里，而舫乘衣糧，並已逐流去，豈復有求生之計邪！唯宜死戰，可以立大功，不然，則無遺類矣。」乃身先士卒，衆亦知無復退路，莫不騰踴爭先。泓衆一時奔潰，即陷長安城。泓挺身逃走，明日，率妻子歸降。城內夷、晉六萬餘戶，鎮惡宣揚國恩，撫尉初附，號令嚴肅，百姓安堵。」

比較…

少々違いがあるが、『宋書』では「渭橋」と書かれているが、『万川集海』では「清橋」である。『宋書』の各写本だが、「欽定四庫全書本」、「摘藻堂四庫全書薈要本」、「武英殿二十四史本」など、すべて「渭橋」と書かれていることにより、中国では「清橋」と書かれることはないかと推測する。

あらずじはほぼ同じく、王鎮悪は將軍として、岸に着いたら、船を捨て、軍を死地に置かせて、勝利を得たという。所謂「必死則生、必生則死」。『万川集海』では、身を守りたいという心があれば、かえって迷いが生じて、身を滅ぼすという結果になりやういと述べている。故に王鎮悪のように、軍を死地に置かせて、全員を専念させ、勝利を得るとするのがよいだろう。以上のことは特に問題がない。

〈第五節〉 詩歌と文章

① 『題烏江亭』

『万川集海』原文：卷二・正心第一・P515（『完本「万川集海」』）

「包羞忍耻是男子」

現代語訳：P55（『完本「万川集海」』）

羞を包み恥を忍ぶ、これ男子。

『題烏江亭』唐・杜牧

『題烏江亭』は杜牧が841年に烏江亭を経由したときに書かれた絶句である。

「勝敗兵家事不期，包羞忍耻是男儿。江東子弟多才俊，卷土重来未可知。」

比較：

現代日本語で訳すと…戦争には勝負は常にある、その先は予測できない。辱を耐え忍ぶことこそ男らしい。項羽よ、江東には人材が沢山いる、若し気を整えてもう一度やり直すれば勝負はまだわからない。

『万川集海』では、「包羞忍耻是男子」だけが引用され、耐え忍びについて述べられている。内容からすれば、特に問題がない。（胯下之辱と同じの所にあるので、参照する）

② 伯樂と千里馬

『万川集海』原文：卷四・将知一・P531（『完本「万川集海」』）

「夫世伯樂ナキ時ハ千里ヲ馳スル馬ナシ」

現代語訳：P67（『完本「万川集海」』）

伯樂のように名馬を見定める人が居なければ千里を走る馬も居ないに等しい。

『馬説』唐・韓愈

『馬説』は唐の文学家である韓愈が書かれた物を借りて主張を言う作品である。七九五年から八〇〇年の間に書かれた。

「世有伯樂，然后有千里馬。千里馬常有，而伯樂不常有。故雖有名馬，祇辱于奴隶人之手，駢死于槽櫪之間，不以千里称也。

馬之千里者，一食或尽粟一石。食馬者不知其能千里而食也。是馬也，雖有千里之能，食不飽，力不足，才美不外見，且欲与常馬等不可得，安求其能千里也？

策之不以其道，食之不能尽其材，鳴之而不能通其意，執策而臨之，曰：「天下无馬！」嗚呼！其真无馬邪？其真不知馬也！」

比較：

この引用は元々『馬説』からの内容だと判断できる。世間には千里馬が常にいるが、伯樂は常にはいないという旨がよく知られて沢山な本にも引用されたため、『万川集海』においては、他の本から参照した可能性も高い。ここは将知一の所で、つまり将は伯樂で、忍者は千里馬であると例えている。忍術は素晴らしいが將軍の知恵は最も重要であると著者が強調している。矛盾していない。

〈第六節〉演劇

①『趙氏孤児』

趙武の物語は『春秋左氏伝』（成公四年・五年・八年）に見え、『史記』趙世家にも見えるが、『万川集海』の内容から見れば、元の劇である『趙氏孤児』を参照にした。

『趙氏孤児』（ちょうしこじ）は、元の紀君祥（きくんしょう）による雑劇で、春秋時代の晋の趙武による趙氏の再興を主題とする^[38]。

この劇は、史実に基づいて創作されたものだが、脚本と登場人物については、かなり歴史とずれている。

『万川集海』原文：卷二・正心第一・P519' 520' 521（『完本「万川集海」』）

「昔秦ノ世ニ趙盾知伯ト云二人ノ者趙ノ國……（省略）杵臼カ戸ヲ埋シ古墳ノ前ニテ自劍ニ伏シ」

現代語訳：

『趙氏孤児』のあらすじ：

楔子…屠岸賈はライバルの趙盾を憎み、刺客を送ったり、西戎国から送られてきた犬に趙盾を襲わせたりした上、靈公の命とつわって趙盾の一族300人を滅ぼした。趙盾の子の趙朔も自殺を命ぜられるが、その妻の公主は妊娠していた。趙朔は公主から生まれる子に「趙氏孤児」と名づけ、一族の仇を取らせるよう遺言を残す。

第一折…公主は屠岸賈に幽閉され、そこで趙氏孤児を生む。趙朔に恩義のある程嬰は公主に薬を届けに行くが、公主は程嬰に趙氏孤児を託して自殺する。程嬰はひそかに趙氏孤児を連れだそうとするが韓厥に見破られる。しかし韓厥は趙氏を憐れに思っで見なかったことにし、自殺する。

第二折…屠岸賈は趙氏孤児がいなくなったことを知り、晋国内の歳一か月以上のか月以下の幼児をすべて殺すように命令する。程嬰はすでに引退していた公孫杵臼に相談に行く。程嬰は自分の子を趙氏孤児とつわって父子ともに死刑になり、本物の趙氏孤児は公孫杵臼にあずけることを提案するが、公孫杵臼は自分が老人であって趙氏孤児が成人するまで育てられるかどうか分からないとして、自分がかわりになることを申し出る。

第三折…程嬰は屠岸賈のもとに出頭し、公孫杵臼が趙氏孤児をかまっていると密告する。屠岸賈は公孫杵臼を拷問にかけて趙氏孤児の所在を聞きだそうとし、程嬰にも公孫杵臼を打たせる。公孫杵臼は口を割らないが、兵卒が趙氏孤児（実際には程嬰の子）を発見し、屠岸賈が程嬰の眼前で殺す。公孫杵臼は自殺する。屠岸賈は程嬰を褒め、その子を自分が育てようと言う。

第四折…20年後、趙氏孤児は程嬰の子として屠岸賈が育て、程勃の名を与えられている。程嬰は屠岸賈が趙氏を滅ぼした経緯を描いた絵を見せて、かたきを取るよう伝える。

第五折…程勃は屠岸賈の前で自分が趙氏孤児であることをあかし、屠岸賈をとらえる。^[38]

比較…

まず、両方のあらすじは同じであるが、人物の名前には違いがある。

『万川集海』では、趙盾が知伯を殺して、知伯の子は孤児として、密かに隠して育て、結局、趙盾を滅ぼすのであるが、『趙氏孤児』では、屠岸賈が趙盾を殺し、趙盾の子が趙氏孤児である。

猶、知伯について…智瑤（ちよう、生年不詳—紀元前655年）は、春秋末期の晋の政治家・武将。姓は不明、氏は荀、もしくは領地名から智（または知）、諱は瑤、諡は襄。智伯または智襄子とも呼ばれる。韓国、魏国、趙国により、一族が全滅した^[39]。

ここでは趙国により知伯の一族が全滅するのに注意したい。

著者は恐らくこの二つのポイントを合わせて論述を展開しただろう。

すなわち、著者は『趙氏孤児』を知っていて、また知伯のことも知っていて、両方を合わせて書かれた。或は参照した本にはこのような間違いがある可能性もある。

人物の名前はともかく、この物語は真実とかなりずれていることに注意したい。著者は正心（仁義忠信）を説得したいという気持ちがあるので、文芸作品までも引用することが納得できる。

《第五章》不明な引用と疑問点

〈第一節〉不明な引用

①『万川集海』原文：巻一・忍術問答・P505（『完本「万川集海」』）

「軍書曰兵法ハ治内知外」

現代語訳：P44（『完本「万川集海」』）

兵法は内を治めて外を知る。

②『万川集海』原文：巻二・正心第一・P513（『完本「万川集海」』）

「法日和顔ハ奇計之始」

現代語訳：P54（『完本「万川集海」』）

穏やかな顔付き奇計の第一条件

③『万川集海』原文：巻二・正心第一・P513（『完本「万川集海」』）

「法日常不妄言者一戦之時為要言」

現代語訳：P54（『完本「万川集海」』）

常に妄言無き者は、一戦の時に要言を出す。

④『万川集海』原文：巻二・正心第一・P515（『完本「万川集海」』）

「法曰見表而勿不察裏也察而勿疎之」

現代語訳：P55（『完本「万川集海」』）

表を見たら、裏を察す」という言葉があり、察すればすぐ行動に移すべきで、これを蔑ろにしてはならない。

⑤『万川集海』原文：巻五・将知二・P538（『完本「万川集海」』）

「法曰有声有響不以言以書」

現代語訳：P73（『完本「万川集海」』）

声は他人に聞えるので将と聞者とは筆談すべき。

⑥『万川集海』原文：卷五・将知二・P539（『完本「万川集海」』）

「法ニ曰有形有影不以墨而以不見墨」

現代語訳：P74（『完本「万川集海」』）

形がある物には影がある。墨で書かなければ墨は見えない。

⑦『万川集海』原文：卷五・将知二・P541（『完本「万川集海」』）

「法曰相圖ハ皆以心傳心也非守古法也」

現代語訳：P76（『完本「万川集海」』）

相図は皆、心をもって心を伝えるものだ。

⑧『万川集海』原文：卷十・陽忍下・P593（『完本「万川集海」』）

「軍書曰出戦時先陣者ハ奥へ行後陣者ハ門口へ行モノ也故出不出ハ旗ニテ知」

現代語訳：P124（『完本「万川集海」』）

出戦の時、先陣の者は奥に行き、後陣の者は門口に行く。よって出陣するかしないかは旗の動きで察知する。

⑨『万川集海』原文：卷十・陽忍下・P595（『完本「万川集海」』）

「六韜曰兵有野則雁乱行」

現代語訳：P126（『完本「万川集海」』）

伏兵が野に居れば雁は乱れ行く。

分析：

以上の九か条の出自がわからない。多く記される「法曰」は、『万川集海』の現代語訳版では、「法」を「司馬法」と訳しているが、『司馬法』には一致する内容はないため、「司馬法」ではないと断言できる。

「法曰」についてだが、『武経総要』（一〇四〇年に編纂を始めとし、一〇四三年に成書した）にある「百戦奇略」において「法曰」がよく出現する。原文を挙げる。

一、計戦

凡用兵之道，以計為首。未戰之時，先料將之賢愚，敵之強弱，兵之衆寡，地之險易，糧之虛實。計料已審，然後出兵，無有不勝。法曰：「料敵製勝，計險阨遠近，上將之道也」。

二、謀戦

凡敵始有謀，我從而攻之，使彼計衰而屈服。法曰：「上兵伐謀。」

三、間戦

凡欲征伐，先用間諜，覘敵之衆寡、虛實、動靜，然後興師，則大功可立，戰無不勝。法曰：「無所不用間也。」

(中略)

百、忘戦

凡安不忘危，治不忘亂，聖人之深誠也。天下無事，不可廢武，慮有弗庭，無以捍禦。必須內修文德，外嚴武備，懷柔遠人，戒不虞也。四時講武之禮，所以示國不忘戰。不忘戰者，教民不離乎習兵也。法曰：「天下雖安，忘戦必危。」

すべて百戦の奇略で、百回「法曰」が出てくる。この「法曰」の内容は、主に武経七書から引用されたものであることから、「法曰」は常に「兵法曰」と訳している。他の兵法書であり、時間をかけて色々探したが、このように頻繫に「法曰」が出てくるのかどうかまだ明らかにできていない。

したがって暫時的に「法」を「兵法」に訳し変えることがふさわしいだろう。引き続き、これらの不明な引用について研究を進めていきたい。

なお⑩の引用に、「六韜曰」と書かれているが、『六韜』にはこのような文は存在しない。

〈第二節〉疑問点

①『万川集海』原文：卷二・正心第一・P.117（『完本「万川集海」』）

「子路力衛ノ出公輒ト云無道人ニ仕テ後ニ討死シタル類也」

疑問点：

『左傳』によると、当時子路は孔悝の家臣として、孔悝を守ろうとしたときに蒯聵に殺されたのであるので、出公輒のためではない。（当時には出公輒は太子の蒯聵と争っているが、蒯聵が反乱した者だとされている）また「出公輒ト云無道人」について、出

公輒が無道人だと著者は思っているが、実はそうでもない。なぜ著者がそう思っているのか興味深い。

《副表》

『万川集海』に出た中国古典目録

兵法書		儒 教	
『孫子』	三十カ条	『論語』	八カ条
『呉子』	一カ条	『大学』	二カ条
『尉繚子』	一カ条	『性理大全』	一カ条
『三略』	六カ条	『孟子』	二カ条
『司馬法』	一カ条	『易経』	一カ条
『六韜』	六カ条	『論語集注』	一カ条
『李衛公問对』	五カ条	歴史書	
『兵鏡』	四カ条	『史記』	四カ条
『太白陰経』	一カ条	『左傳』	一カ条
『喻子十三種秘書兵衛』	一カ条	『三国志』	一カ条
『七書直解』	一カ条	『宋書』	一カ条
『十一家註孫子』	二カ条	他	
『孫子書校解引類』	一カ条	『唐開元占経』	二カ条
『武経七書匯解』	三カ条	『黄帝内経』	
『武備志』	二カ条		
『武経総要』	二カ条		

《おわりに》

最後に本論のまとめを行う。『万川集海』において、全篇に引用された内容はそんなに大きく矛盾していないと考えられる。

まず兵法書からの引用について、引用は全書にあるが、武経七書の他、『兵鏡』、『七書直解』、『太白陰経』、『十一家注孫子』、『孫子書校解引類』、『喻子十三種秘書兵衛』、『武経七書匯解』、『武備志』などがある。その中に『孫子』「用間篇」は最も多く引用されたことが確認できた。全体的な引用は特に問題がないといえるが、ある引用箇所できちんと説明がないまま書かれていたこと、特に『万川集海』の遁甲篇と天文篇において、そのまま長く抄出することがあった。また間違えて抄出していたり、字が漏れていたりと理解しにくい箇所もいくつか存在した。

また『武経七書匯解』からの引用について、『武経七書匯解』の一番早い出版時期は、一六八八年であり、現在知られている『万川集海』の成立時間である延宝四年（一六七六）と一二年遅い。なお、『江戸時代における唐船持渡書の研究』により「明和五戊子年 武経七書匯解 一部二套」と書かれており、日本への輸入時期が一七六八年であることが分かっており、九二年のズレも判明した。九二年というところかなりの時間差であり、『万川集海』巻一はその時期に書かれたものか、あるいは『江戸時代における唐船持渡書の研究』の記述が間違っていることになる。また『武経七書匯解』中の「言謂間諜中事」について、著者はこれを参考にして、「間」の重要性やその効果を強調している。ただし、「言謂間諜中事」についての本人の解釈は存在しない。本人が知っている限りでは恐らく『武経七書匯解』だけにはこの文がある。従来に「言」は「太公言」（『太公金匱』）であると認識されてきたが、「言」とは「間諜」であることに疑問を持っている。

次に、儒教に関する引用について、それが「正心篇」に集中されているため、「正心」は儒教に影響されているといえる。「正心篇」においては、儒教書籍の他に、「三焦」という伝統中国医学概念もあり、その源である『黄帝内経』の思想が見られる。引用は『論語』をはじめ、『大学』、『孟子』、『周易』、『性理大全』、『論語集註』である。儒教思想により、「正心」の重要性が説かれている。その引用については特に矛盾はない。ただし、忍者の「正心」というのは「仁義忠信」であり、儒教に提唱された「五常」（仁義礼智信）と字面には少々違っているものの、「五常」の他に「三綱」もあり、儒教は忠も強く提唱していることが明らかになった。

それから歴史書と文芸作品からの引用について、この部分は歴史物語が一番多く、『史記』、『三国志』、『左傳』、『宋書』などの歴史書のほか、詩歌、文章、演劇な

どからの引用もある。特に元時代の演劇である『趙氏孤児』のあらずし部分が長く引用され、仁義忠信を謳っている。その物語を通して、主人公が持っている崇高な精神を強調し、『万川集海』の信憑性、説得力を高めている。ただし、『趙氏孤児』は歴史に基づいて書かれた物語であるから真実ではない。著者の意図は分かるが、作り話で主張を補強するとは言語同断である。この点に注意したい。引用は「正心篇」と「将知篇」に集まっており特に問題がないと判断した。

最後の不明な引用について、これについては出自がわからないので解釈しにくく、今後の課題である。また『完本 万川集海』の現代語訳では、「法曰」というのを全部「『司馬法』曰く」と訳しているが、これは相応しくない。「『司馬法』曰く」ではなく、「兵法」と訳した方が適当だろう。そして、子路が無道人に仕えて死んだということについては非常に興味深い記述だといえよう。中国ではこのような認識がなく、むしろ子路は義礼のために命を捨てたという英雄のような印象が強い。

以上、本論文では『万川集海』に引用された中国古典の内容について、比較研究を行った。まだ不明な引用や疑問点が残っているため、今後もより深い研究を進めていきたい。

本論文執筆にあたり、山田雄司先生、吉丸雄哉先生、高尾善希先生には多大なご教示を頂き、大きな助けとなった。また同じ三重大学院生である郷原匠さんには沢山のアドバイスを頂いた。この他、支えて頂いた全ての皆様に心からの感謝を申し上げ、本稿をここで擱筆することにした。

《參考文獻・資料》

- ① 『中国兵書集成』（解放軍出版社・遼沈出版社、1987年8月）
- ② 『中華兵法大典』
- ③ 『中國歷代兵書集成』（團結出版社、1995年5月）
- ④ 『孫子兵法・中華經典名全本全注全訳叢書』（中華書局出版社、2011年10月）
- ⑤ 『中國歷代名著全譯叢書・孫子全譯・周亨祥譯注』（貴州人民出版社、1990年9月）
- ⑥ 『孫子今注今譯・魏汝霖注譯』（台灣商務印書館、中華民國六十一年八月）
- ⑦ 『吳子・司馬法・中華經典名全本全注全訳叢書』（中華書局出版社、2018年1月）
- ⑧ 『吳子訳注・黄石公三略訳注』（河北人民出版社、1992年6月）
- ⑨ 『吳子今注今譯・傅紹傑注譯』（台灣商務印書館、中華民國六十一年四月）
- ⑩ 『司馬法今注今譯・劉仲平注譯』（台灣商務印書館、中華民國六十四年一月）
- ⑪ 『尉繚子今注今譯・劉仲平注譯』（台灣商務印書館、中華民國六十四年二月）
- ⑫ 『中國歷代名著全譯叢書・尉繚子全譯・劉春生譯注』（貴州人民出版社、1990年9月）
- ⑬ 『唐太宗李衛公問對今注今譯・曾振注譯』（台灣商務印書館、中華民國六十四年9月）
- ⑭ 『十一家注孫子校理』（中華書局出版社、1999年3月）
- ⑮ 『喻子十三種秘書兵衡』（十三卷・明・喻龍德撰・明天啓時期鄭大經刊本）
- ⑯ 『四書五経』（中華書局、2008年12月）
- ⑰ 『論語今注今譯・毛子水註譯』（中華民國六十四年十月）
- ⑱ 『論語本解』（生活・讀書・新知 三聯書店出版社、2009年4月）
- ⑲ 『大学今注今譯・宋天正註譯』（中華民國六十六年二月）
- ⑳ 『周易訳註』（上海古籍出版社、2007年4月）
- ㉑ 『史記今註・馬持盈註』（台灣商務印書館、中華民國六十八年七月）
- ㉒ 『中國歷代名著全譯叢書・史記全譯・楊燕起譯注』（貴州人民出版社、2001年7月）
- ㉓ 『三國志上、下』（岳麓書社、2002年8月）
- ㉔ 『中國歷代名著全譯叢書・左傳全譯・王守謙等譯注』（貴州人民出版社、1990年9月）
- ㉕ 『性理大全』：<https://sou-yun.cn/eBookIndex.aspx?id=1125> 閲覽日：2021年10月30日
- ㉖ 中國哲學書電子化計劃：<https://ctext.org/zh> 閲覽日：2021年10月30日
- ㉗ ウィキペディア：<https://ja.wikipedia.org/wiki> 閲覽日：2021年10月30日

《註》

- [1] 『万川集海』の伝本研究と成立・流布に関する考察」 福島嵩仁 おわりに：
第二章では、『万川集海』の成立および著者について、従来までは著者は「藤林左武次保武」であると考えられてきたが、正確には「富治林傳五郎保道」であることがわかった。このことは、本文に記載される流派の特徴からも、藤林（富士林）が著したものであることを裏付けられた。
- [2] <https://www.kokusho.co.jp/np/isbn/9784336057679/>
『完本 万川集海』中島篤巳 訳註 発売日：2015/05/22 判型：A5変型判
ISBN：978-4-336-05767-9 ページ数：746頁 Cコード：0021 定価：7,040円（本体価格6,400円）
- [3] 『日本兵法史上』石岡久夫 第一章序説
- [4] 『新中国成立以来「孫子兵法」研究述略』姚振文、吳如嵩 3.1《孫子兵法》作者及成書年代問題研究
- [5] <https://ja.wikipedia.org/wiki/孫子>（書物）、または「5.1 日本への伝来」による。
- [6] 『清華簡与伊尹伝説之謎』杜勇、中原文化研究、2014年9月8日、中図分類号：K223.K877
- [7] 『清華簡「赤鵠之集湯之屋」与伊尹問夏』劉国忠、深圳大学学报（人文社会科学版）第30卷第1期、2013年1月、中図分類号：K221.04
- [8] 『呂尚与西周的創建』韓玉徳、東方論壇、2001年第3期
- [9] 「『孫子』と『万川集海』とを比較して」片倉望
- [10] <https://ja.wikipedia.org/wiki/六韜>、または「4、伝承」による。
『兵法勝ち残るための戦略と戦術』：P48。
- [11] <https://ja.wikipedia.org/wiki/三略>、または「概要」による。
- [12] <https://ja.wikipedia.org/wiki/呉子>、および『呉子』
- [13] 『兵法勝ち残るための戦略と戦術』：P36、P37。
- [14] 『兵法勝ち残るための戦略と戦術』：P40。
- [15] 『兵法勝ち残るための戦略と戦術』：P66。
- [16] 『中国兵書集成』第三十八冊、第三十九冊、「《兵鏡》編輯説明」による。
《兵鏡》 分編为《中国兵书集成》第三十八冊、第三十九冊。
- 《兵鏡》 一題《兵鏡吳子》，全書十三篇，二十卷，另有《兵鏡綱目》一卷。明庚申岁（万历四十八年，即公元一六二〇年）前后，四川新都吳惟順、吳鳴球、吳若礼編輯。该书

内容涉及军制、选将、任将、将职、选兵、讲武、行军、计战、营阵、攻守、军需、天文、地理。江起龙在《兵镜凡则》中说：「是书抽阴符之秘，泄玉版之精，不简不繁，准古酌今，而集其成」，「间有发前人所未发，道时人所不敢道者」，「勘乱之韬铃，保泰之经济，文治武备，均不可少」。其内容相当丰富，对于学习研究我国古代军事思想，具有重要参考价值。

[17] 《张居正增订〈武经七书直解〉版本考辨兼论〈孙子直解〉的增订情况及其学术价值》赵英，钟少异：一、张居正增订《武经七书直解》现存版本概览 による。

《武经七书直解》，明刘寅著，该书是奉明太祖朱元璋旨意而作，成书于明洪武三十一年（1398），卷首有目录、序言、凡例、读书兵法、武经所载阵图、武经所载国名、兵法附录等，关于直解《武经七书》的缘由，刘寅在《武经直解序》中说：「洪武三十年，岁在丁丑。太祖高皇帝有旨：『俾军官子孙讲读武书，通晓者临期试用。』寅观孙武旧注，数家矛盾不一，学者难于统会，《吴子》以下，六书无注，市肆板行者阙误又多，虽尝口授于人，而竟不能晓达其理，于是取其书，删繁撮要，断以经传所载先儒之奥旨，质以平日所闻父师之格言，讹舛者稽而正之，脱误者订而增之，幽微者彰而显之，傅会者辨而析之，越明年，藁就；又明年，书成，凡二十五卷一百一十四篇。」

[18] 『兵法勝ち残るための戦略と戦術』：P70。

[19] 『宋刻本「十一家注孫子」匯考』褚良才 浙江大学学报（人文社会科学版）第30卷第4期2000年8月

[20] 『中国兵書集成』第12冊、「中国兵書集成第十二冊編輯說明」による。

《孙子书校解引类》亦称《孙子书》，是明代赵本学（虚舟）研究《孙子》的一部重要专著。成书于明隆庆2年（一五六八），由明代抗倭名将谭纶总督蓟、辽、保定军务时刻成，称之「蓟辽旧刻。」到万历年间又有重刻。其自序中谈及：「学不自量，窃为忧之，于是重为校仇而通释之，又取古人一二已行之事，以证其下，名之曰校解引类。」又按书中凡例：「校以订误，分书本文之下；解以训义，下本文一字；引类以证实，又下解一字。」这说明著者的意图所在。其书章节句辞盖融贯《孙子》十家注及讲义、直解等书而成，又以史传证实，别为引类。著者对《孙子》文句作了许多慎重而又重要的校勘，其释文对研究孙子的军事思想有很高的参考价值。

[21] <https://www.shuge.org/ebook/mi-shu-bing-heng/>

此《喻子十三种秘书兵衡》为明代代喻龙德撰，龚居中辑。全书共分：武论鬻偏肩、武策交窄、阵法神为、奇计泣天狼、霹雳星、闭户周疆、奇门鬼吼、禽遁蜃楼山象、太乙相天根、天书龙女珠等十三卷，主要内容是以阴阳玄学、奇门遁甲为主的兵书。此为明天启时期郑大经刊本。

是书附载四扫长歌，其自序云：「行至江涓，百路浑绝，不知东西，忽有道翁，猛出奇声，低喝喻生曰：尔忘天书与奇遁耶。吾昔命九玄山人假手苍童，授尔秘术，俾尔合显冥之道，以济当世。」卷道列授受印证师友源流，首无上人，即其事也。按自古为兵家言者，往往托之神道，以奇其书。况龙德报国有心，进身无路，忧愁抑郁，著为此书，惟恐不见知于人，遂不得不用此技俩。阅其内容，不过摭拾古人牙慧，毫无发明，较之王鸣鹤茅元仪诸家，远不及也。盖布衣书生，既鲜修养，又无经验，故其成就仅止尔尔。惟是书传本不多，乾隆间曾加禁绝。

[22] 『兵法勝ち残るための戦略と戦術』：P73。

[23] 『中国兵書集成』第42、43冊、「武经七书汇解编辑说明」による。

《武经七书汇解》编为中国兵书集成第四十二、四十三两册。此书为清康熙年间青溪朱埔纂辑。早在康熙二十七年（一六八八年）即有《武经汇纂》八卷刻本。康熙三十八、三十九年先后又有《武经七书讲义全汇合参》、《（增补）武经七书汇解》、《武经七书汇解》等多种版本问世，虽书名有异，其内容基本相同。

[24] 『朱埔生平考』尤成遠・廖文婷 『長江從刊』2018.04

[25] 『武經七書匯解』謝祥皓

[26] 『清朱埔「尉繚子匯解」注釈体例「直解」之特征与価値』師雨柔・廖文婷・許富宏

[27] <https://ja.wikipedia.org/wiki/論語>

[28] 『忍者の精神』第三章 正心とは？（山田雄司、角川選書 令和元年5月24日）

[29] <https://ja.wikipedia.org/wiki/大学>（書物）

[30] <https://ja.wikipedia.org/wiki/孟子>（書物）

[31] えききょほう「エキキヤウ」【易経】デジタル大辞泉 易経とは何？ Weblio 辞書

[32] 性理大全 ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典 性理大全とは - コトバンク (kotobank.jp)

[33] <https://ja.wikipedia.org/wiki/論語集注>

[34] <https://ja.wikipedia.org/wiki/史記#日本における受容>

[35] <https://ja.wikipedia.org/wiki/三國志>（歴史書）

[36] <https://ja.wikipedia.org/wiki/春秋左氏伝>

[37] <https://ja.wikipedia.org/wiki/宋書>

[38] <https://ja.wikipedia.org/wiki/趙氏孤児>

[39] <https://ja.wikipedia.org/wiki/智瑠>